

10月11日の授業への質問・回答

とりあえずいろいろ見て、それぞれの作品がそれぞれの時代にどう扱われていたのかが気になった。単に美術作品としての価値だったのか、宗教の教義を伝えるものなのか、性的な欲求を満たすためなのか。そのいずれもでしょう。どれかひとつに限定する必要はないと思います。むしろ、美術とは何かとか、人間が美しいと思うものは何か、という問題に関わるでしょう。性的な欲求を含め、快楽を求めることも、美術の受容のあり方のひとつです。前回の授業では「とりあえず、いろいろ見てみよう」ということで、いろいろお見せしましたが、それぞれの作品で、その価値や意味はさまざまです。大半を占めていたヨーロッパの絵画でも、古代ギリシャと中世、ルネッサンス、近代、現代など、時代によって裸体画やグロテスクな絵の持つ意味は違います。近代にいたっては商業的な要素も加わります。どのような人々を対象に作られたかも重要です。とは言っても、前回紹介した作品は、比較的良好に知られたものが大半です。たとえば、ティツィアーノの「眠れるヴィーナス」や「ウルビーノのヴィーナス」、そしてその延長線上にあるマネの「草上の昼餐」や「オランピア」が、美術史上に占める位置や、裸体画としての独自性などは、西洋美術史の入門書を読めば、必ず書いてあります（その意味でアラスの『なにも見ていない』は新しい知見を示す研究です）。むしろ、このような「よく知っている」裸体画と、仏教美術や東洋美術の裸体画、あるいはグロテスクな作品とを対比させることで、背後にある文化の違いを意識して欲しいと思います。

日本の絵が平面的で、色の数が少ないのに対し、ヨーロッパの絵が奥行きを持ち、色が多いせいか、ヨーロッパの絵の方がエロティシズム、グロテスクの度合いが増すように感じるのは気のせいでしょうか。作者による描き方の違いなど、興味深く見ることができました。

70枚ほどのスライドをお見せしたので、とくに後半はひとつひとつの作品を丁寧にみることはできませんでした（ある程度は予測していましたが）。その中で、特徴をよくとらえているので感心しました。たしかに日本の絵、とくに前回紹介した浮世絵は、版画ですから平面的な画法になります。もっともこれは、浮世絵に限らず、日本絵画や東洋美術にある程度、共通する特徴かもしれません。インドの細密画も平板といえは平板です。ただし、私の考えですが、平板だからエロティシズムやグロテスクの度合いが感じられないかどうかは、いろいろなケースがあって一概には言えないと思います。たとえば、日本ではアニメや漫画がひとつの文化として、他のどの国よりも大きな力を持っていますが、それも「平板な絵画」の伝統を受け継いでいるような気がします（アニメは絵巻物と結びつけられますが、むしろ直接の起源は浮世絵でしょう）。だからといって、そこで見られるイメージに「エロティシズムやグロテスクの度合いが感じられない」ことはないと思います。なお、マネの「オランピア」は西洋絵画の伝統を無視するような形で、あえて女性の裸体を平板に描いたことも画期的といわれています。それがスキャンダラスな絵としてとらえられた原因と考える研究者もいます。マネをはじめ、印象派の画家たちが浮世絵や春画から影響を受けたこともよく知られています。

四方田さんというどっかの大学の先生が『かわいい論』という本の中で「キモカワイイ」について記述していましたが、キモい（気持ち悪い）とかawaiiは近いものようです。それと同じで、エロいのとグロテスクなのはかなり紙一重のところでは存在しているのだなと感じました。そういえば、西洋は男女が絡む絵は少なめですね。個人的に聖女＝処女という信仰が絡んでくるのではと思います。処女信仰についてもどっかで話して欲しいと思いました。

エロいものとグロテスクなのが紙一重というのはそのとおりですが、それではあまりにあたりまえなので、何かひねった見方ができないかと考えています。最初の授業で示した「エロスとグロテスク」という対比は「生と死」に置き換えられるというのもそれと同様で、本来、対立する概念のようなものが、じつは同じ根っこを持っているというような見方です（私も近著の『生と死からはじめるマンダラ入門』で使っています）。これは、二項対立を両義的という概念でとらえなおす、ひところの人類学者や記号論の人たちと同じなので、今回の授業では、少し違う可能性を模索してみたいと思います。男女が絡む絵は、美術史に残るような偉大な芸術家の作品としてはあまりありませんが、ポルノグラフィーの形では西洋でもいくらでもあります。日本ではそれがひとつのジャンルとして確立し、しかも美術史のレベルでも扱うことができる点に特徴があります。美術の教科書に出てくる北斎も歌麿も、せっせと春画を描いていたのですから。最後にあげてくれた処女信仰は、この授業では扱えないと思います。マリア信仰や聖女信仰、その裏返しとしての魔女などが関係してくるのでしょうか。

『プリマヴェーラ』で天使が目隠しているのはなぜでしょうか？西洋の絵はあまり見ないので（日本の絵もそんなに見ませんが）、新鮮な印象を受けました。とくに「生と死の樹」は対称の構図を生かしており、上手いと思いました。「喜能会之故真通」は以前見たことがあったのですが、もっと春画が見たかったです。また、生き人形は性の対象になったようですが（江戸川乱歩にそんな小説があったような・・・）どうなのでしょう。

天使（プットー）が目隠していることについては、今回か来週かの授業で取り上げるつもりです。インドの愛の神も同様なのです。弓矢のシンボリズムについては、愛染明王にも関係します。「生と死の樹」は、本当にこの授業のためのような作品です。この作品については、ほとんど知識はありませんが、樹木については、やはり今回の授業で取り上げます。春画は以前は、わいせつな図画ということで出版できなかったのですが（出版するときはぼかしが入りました）、現在では問題ないようです。文献にあげておいた『別冊太陽』がいろいろな画家の作品を見る上では便利ですが、本屋や図書館にはもっと重厚な全集などが置いてあります。生き人形についての知識も、私はほとんどありません。一昨年、熊本県立博物館（と記憶しています）で、本格的な展覧会が開催されて評判になりました。ほとんどが海外に流出した作品で、「帰国展」でした。江戸時代の人々がそのまま現れたようで、会場は異様な雰囲気だったようです。朝日新聞でもとりあげた記事があったのを記憶しています。江戸川乱歩の小説は読んでいないので、知っている人は教えてください。

天の川がなぜミルクウェイと呼ばれるのかがわかって良かった。日本の春画はきちんと見たことがなかったが、とても過激だったので驚いた。日文の授業で「好色五人女」をやるので、そちらとも関連づけられるとよいと思った。

ミルクウェイはそのとおりで、ヘラの乳房からほとぼした乳が起源です。この乳は、飲んだものに無敵の力を与えるので、それを飲んだヘラクレスは不死身になりました。ちなみにヘラクレスは、ヘラの夫のゼウスが、人間の娘アルクメネとの間にできた子で、ヘラの乳房に吸い付いたのも、ゼウスのたくらみでした。ヘラは貞節の守護神ですが、ティントレットの絵では、全裸で描かれています。ヘラは「パリスの審判」にも登場しますが、そこでは美の女神ヴィーナスに敗れています。ヘラはアトリビュートとして孔雀を伴い、ティントレットの絵でもルーベンスの「パリスの審判」にも描かれています。孔雀はインドでは愛欲と関係のある動物で、日本の密教儀礼でも孔雀明王を主尊とする儀礼は安産のために行われます。春画が過激なのはそのとおりですが、日本美術の中の「エロス」としては、避けては通れないので、あえて最初に紹介しました。授業の後、比較文化の研究室で、この授業をとっていない学生に「今日は春画を

とりあげた」と言ったら、「どうして、そんな気持ち悪いものを見せるのか」という非難を受けました。そりゃまあたしかにそうなのですが・・・。

女の人がみんなぽっちゃりしていたのですが、やはりあれが（丸いのが）その当時の女性の美しさなんですか？というか、西欧諸国の・・・？グロテスクというので、少しビビっていましたが、カエルがへばりついていることや、かわった顔つきでグロテスクというのは、意外でした。カエルってそんなに気持ち悪がられて、かわいそうですね。蛇信仰はよく聞くけど、蛙信仰って聞かないですね・・・。

たしかに蛙信仰は聞きませんね。日本ではカエルはほとんど宗教的には重要性を持たない動物のようです。オタマジャクシから姿をかえるのなんかは、けっこう、宗教学者に受けそうなイメージなのですが。カエルは地域によって、大きさや色、形態などがずいぶん異なるので、扱いも様ではないようです。食用にする国も多いですね（日本も食用蛙がいますが）。昔、W. サローヤンの小説を読んでいたら、かわいい女の子を「カエルちゃん」と呼んでいてびっくりしました（『ママ・アイラブユー』新潮文庫）。日本人の女の子なら傷つくでしょうね。ベルトリッチ監督の映画『1900年』では、主人公の少年が、つかまえたカエルを何匹もワラでつないで、腰や頭に飾っているのを見て、グロテスクと思いましたが、ヨーロッパ人はそうは思わないのかもしれませんが（日本人もメザシやししゃもがワラでつながっていても、気持ち悪くありませんから）。それはともかく、グロテスクの作品は、実際はあまり思いつくものはありません。エロティックな作品にくらべると、苦戦しそうな気がします。

生々しいものを描く、作るほど、気持ち悪かったり、美しくないということは、普段、誰かを見て「美しい」と思うときはどうなっているのかと思った。理想・美しい ⇔ 現実・みにくいというのが、おもしろかった。

「生々しいものはグロテスク」というのが、今回の授業で気になっているテーマのひとつです。グロテスクなものをさらに誇張すると滑稽になることもあります。ふつう、美術作品は「リアルな表現」が重要と思われていますが、実際は、特定の形式や様式、あるいは画家の個性にはめ込んだ作品の方が傑作として残っていることが多いようです。むしろ、「リアルではない」ものを、いかに「リアル」と思わせるかがポイントかもしれません。この考え方に従えば、普段、誰かを見て「美しい」と思うのは、自分が持っている美の形式に、その対象がうまく当てはまったときに、そうなるのでしょうか。

日本の浮世絵がやけにリアルで、気持ち悪かったです。でも、リアルな現実の人間は気持ち悪くない。それをコピーした感じのものが、気持ち悪いというのは、とても不思議な感じがしました。日本にあんなリアルなポルノグラフィティがあったとは驚きです。

やはり、春画は気持ち悪いと思う人がかなりいらっしゃるようです。今のところの予定では、前回だけの登場のつもりです。最初の授業でお見せした理由は、すでに書いたとおりですが、西洋の絵画やインドの美術と比較して、日本文化のもつ特殊性に気付くことが目的です。ところで、一般的な「リアル」という語の意味にしたがえば、春画はリアルではありません。授業で少し紹介したように、あれは極端に誇張されたイメージです。養老猛司氏はそれを「性行為中の人の脳における、生殖器の占める大きさを、相対的に表現したもの」と説明しています。そして「身体の脳化」という考え方をそこから導いています。さすが『バカの壁』とかのベストセラー作家（脳学者）ですね。なお「ポルノグラフィティ」はバンドの名前で、「ポルノグラフィター」が正しいと思いますが・・・。

10月18日の授業への質問・回答

各国の創世神話が興味深い。生も死の始まりというのがすごく勇気づけられました。中国の万古の左目→太陽、右目→月は、イザナキの左目を洗ったときにアマテラスが、右目を洗ったときにツクヨミが生まれたこととそっくりで、やはりどこかつながってたり、似たようなものがあるのかなと思う。ヤクシャがだんだん、低年齢化し、滑稽化するのには、何か意味があるんですか。後、ヤクシニーは日本語化（ヤクシャ→夜叉）のようにしていますか。死神、時の神＝クロノスですか。

創世神話はたしかにおもしろいです。エリアーデなどは、創世神話は神話の中でもとくに重要であると考え、彼が提唱した「聖体顕現」（ヒエロファニー）の説明でもよく取り上げています。日本神話、とくに古事記の創世神話が、周辺の地域とどのような関係があるかは、いろいろ研究があり、中国の盤古との結びつきも、当然指摘されています。前回の授業で紹介した大林太良『稲作の神話』にそのあたりのことがくわしく書かれていますので、読んでみてください。大林先生は10年ほど前に亡くなりましたが、堅実なお仕事をされて、われわれにも勉強になります。読みやすいものとしては、やはり、前回プリントにした吉田敦彦氏のものがありますが、若干、論理が荒いような気がします。ヤクシャの低年齢化、滑稽化は、実際の流れをたどるとそうなのですが、その理由はよくわかりません。この授業の中で、何か答えが見つければと思います。講義を進めながら、同時進行で考察をしていますので、皆さんからのアイデアにも期待しています。ヤクシニーの日本語は「女夜叉」とか「夜叉女」かもしれませんが、あまり見たことがありません。日本語や漢語には性がないので、しょうがないのでしょうか。死の神、時の神に関しては、これも文献としてあげたパノフスキーの『イコノロジー研究』所収の「時の翁」が決定版です。「盲目のクビド」も同書には含まれていて、この分野では必読です。

比較文化っぽかったですね。日本～インドをつなぐ樹木と女性の図の関連が興味深かったです。ところで、このお釈迦様の色っぽいお経は、詩でなく、お経なんですか？いつ、どんな風に読まれたもんなんでしょうね。キリストの山での試練もそうですが、悪魔は色欲と恐怖しか、威嚇手段がないんでしょうか。逆にこのふたつが人間の大敵なんですかね。前から気になっていたのですが、ストゥーパの前のトーラナ、これは門ですか。鳥居に似ていますね。

仏典の中のエロスとグロテスクとして紹介した『ブッダチャリタ』は、たしかに詩です。釈迦の生涯を伝える文献を「仏伝文学」と総称しますが、その中のひとつで、全編、詩でできています。作った人も馬鳴（めみょう、サンスクリットではアシュヴァゴーシャ）という人物で、そういう意味では、お経とは少し性格が違います。ただ、漢訳された『仏所行讃』は経典として伝わりました。われわれ日本人にとって、お経というのは法要や葬儀でお坊さんが唱える経典のイメージが強いのですが、これは「読誦経典」と呼ばれ、すべての経典のごくわずかです。お経はもともと儀式で読誦されるために作られたのではないからです。もっと言えば、仏教の儀式で経典を読誦することも、必ずしも一般的なことではありません。仏教の文献の豊穡な世界や、官能的なテーマさえも経典として伝わることを強調するために、「これもお経です」と言いました。悪魔の2種の攻撃手段ですが、これは前回の授業のテーマでもあるように、いずれも生命に関わるという点で、類似の性格を持っているのではないかと思います。誕生と死は正反対の概念ではなく、輪廻という生命の連鎖をつなぐ重要な節目であることは、両者で共通するという事です。トーラナは四方の門に当たります。鳥居に似ていることは、いろいろな人も言っていますが、日本の鳥居の起源を私は調べたことがないので、よくわかりません。考古学や日本史の人で詳しい人がいたら、

教えてください。

今回の講義から、生命や死といったイメージが世界中に見られることがわかりますが、ヨーロッパとインドという関係で見ると、インドにはアーリア人が流入してきたという点が気になります。それらの形成にはアーリア人が大きく関わっていると見てよいでしょうか。もっとも、自分はアーリア人が本もともとどこに住んでいたのかさえ知らないの、かなり適当なことを言っているのかもしれませんが。

インド文化を考えると、アーリア人の存在はたしかに重要です。西アジアかその北の方からカーリア人は大移動をし、あるものはインドに、あるものはイランに、そしてあるものはヨーロッパに向かいました。言語ではインド＝ヨーロッパ語族として、かれらはひとつにまとめられ、言語相互に親縁関係があることが明らかにされていますし、神話のレベルでもそうです。ただし、前回とりあげたヤクシャやヤクシニーへの信仰は、インドに侵入したアーリア人が持っていたものではなく、もともとインドにあった土着的（この言葉自体、あいまいですが）な信仰といわれています。ヨーロッパのバックスやヴィーナスとつながりがあるのは、起源が同じと見るよりも、大規模な文化交流の結果として生まれたものでしょう。それとともに、交流がなくても、人間の持つ普遍的なイメージがある場合もあります。

撰集の授業で春画に興味を持ったので、『春画 片手で読む江戸の絵』を図書館から借りて読んでいます。外国人の方が書かれたので、言い回しがおもしろかったりしますが、内容も興味深いです。インドでは「愛」を、ガンダーラでは「グロテスク」を強調していますが、なぜ、そのような違いがあるのでしょうか。どちらも仏教ですよ。お国柄でしょうか……。

授業で紹介する参考文献を、早速参照してくれてよかったと思います。インド内部とガンダーラで、降魔成道の表現が異なること理由はよくわかりません。もともと、インドの仏教美術が、前回紹介したヤクシニーに見られるように、官能的な女性の姿をひとつの主題として有し、そのイメージが説話図にも容易に取り入れられたと思いますが、なぜそのような主題が好まれたかになると、また別の理由が必要になるでしょう。今回取り上げるミトゥナ像についても、その背景に『カーマ・ストトラ』のような文献を持ってきて、カーマ（愛欲）がインド人にとって、重要な人生の目的であるとか説明されますが、そんなことはどこの国でも同様なはず。一方のガンダーラは、同じ女性像やミトゥナ像でも、開放的なインドにくらべるとずっと禁欲的です。「お国柄」と言ってしまうればそれまでなのですが、それを生み出す文化背景を考察することが重要ですね。

とくに古事記の中にだが、汚物から生まれたものを神として崇拝するという感覚が理解できない。仏教やヒンドゥー教にも、そのような神はいるのだろうか。聖と汚は表裏一体といったような考えでもあるのだろうか。バックスは酒の神であるから、醜態をさらす表現は理解できるが、ヤクシャは生産などの神なのに、醜態をさらすような表現が出てくるのが不思議だ。イメージとしては、酔っぱらった自分の母親のような。あまり「母」としてはよいイメージではないはずなのに、なぜだろう。だんだんとヤクシニーがデフォルメされていったように、そのイメージも稀薄になっていったのであろうか。

たしかに、汚物から生まれた神を崇拝するというのは、現代人的な感覚からは理解できません。古事記を伝えたり、編纂した人々にもそれはあったようで、スサノオがオホゲツヒメを殺してしまうのも、そのような形で生み出された食事を「ケガレたもの」としてとらえたからでしょう。しかし、このようなモチーフは昔話の中にもけっこう残っていて、「ハナをたらした神」などでは、異界から来た子どもが涙水や臍のゴマから宝を生み出すという形を取ります。これもオホゲツヒメ型の神話のひとつといわれます。また、日本民族学では「ハレ」「ケ」「ケガレ」という3つの概念でいろいろ宗教現象を説明することが多く、

ここでは「ケガレ」はマイナスのイメージを持つのですが、それ故に特別な扱いをうける必要があります（「ケガレ」は「ケが枯れる」から来るとい説もあります）。酒に酔って醜態をさらすヤクシニーは、マトゥラーの有名な作品ですが、たしかにそれまでのヴィーナス的なヤクシニーとは異なります。今回はこのあたりから「エロ的なイメージ」の世俗化を考えてみようと思います。

インドの女性は胸が大きいのと、同時によくくびれていました。くびれた女性の方が受胎しやすいと聞いたことがあります。インドの女性がくびれているのは、生命を生み出すのに有利な特徴だからかなと思いました。

インドの美女の条件のひとつが、ウェストのくびれでしょう。実際に、インドの女性はそのような体格をした人がたくさんいます。サリーという女性の衣装がありますが、これもウェストのくびれを強調するような形態をしています。くびれた女性の方が受胎しやすいかどうかは、よくわかりませんが、もしそうだとしたら、彼らも経験的にそう考えていたのかもしれませんが。ただし、生物学的、医学的な特徴が、必ずしも美の表現と結びつくわけではないと思います。

古事記は全部読んだわけではないのでわかりませんが、レジュメにある部分をちょっと読んだだけでも、お尻から食物を出したりとか……。島根県の出雲市出身で、幼いときから神話にふれることが多かった私は、昔、神話を読むたびに、「神話って、あからさまに下ネタだよなあ」と感じていたことを思い出しました。それで思ったのですが、当時の人は「聖」は聖なるものとして、みんながそう思っていたのでしょうか。というか、性をタブー視する発想は、いつから生まれたのでしょうか。たとえば、家族とテレビドラマを見たりしていたとき、ラブシーンになるとどこことなく親も子どももたがいに気まずくなる雰囲気は、いつに起源を発するのでしょうか？とふと疑問に思いました。

神話は下ネタばかりですね。これは日本に限ったことではなく、世界中でそうだと思います。古事記や日本書紀は、日本人ならば誰でも知っていますが、実際にその文章を丁寧に読むことは、意外に少ないのではないのでしょうか。かくいう私もそれほど読んだわけではなく、今回の授業であらためて読んでみて、宗教や文化研究にとって、宝の山のような気がしました。性は「聖なるもの」という図式は、広く言われることですが、この授業ではむしろ、そこに陥らないようにと思って進めています。「聖」という概念自体、近代的なものですし、それでくくってしまうと見えなくなるものが多いと感じるからです。性をタブー視するのがいつ頃かは、いろいろ議論があるようです。前々回に紹介したエリアスは、比較的最近のことと言ひ、それに対してデュルはさまざまな事例を挙げて、もっと古くからあることを主張します。テレビを見ていて気まずくなるのは、またそれとは別だと思いますが、それはともかく、ラブシーンを家族で観るといこと自体、テレビが家庭に登場するまでなかった状況です。雑誌や本の形で性に関するイメージや情報が家庭に持ち込まれることはあっても（春画はその典型です）、それはひそかに楽しむものであって、親子で共有するものではありません。現代は、人類史上、かつてないほど、エロスやグロテスクのイメージが人々の暮らしを浸食している時代なのでしょう。

ジョージ・フレーザーの『金枝篇』を読んだことがあるが、そこではアドニス死と再生の豊穡の神として、イタリアのネムの森の殺される神官の儀式と結びつけていた。つまり、植物神は季節の変わり目に殺され、復活する。殺されることによって、霊力は増強するのだ。インドのヤクシャなどは、豊穡の神だが、アドニスのように死んで復活することはあるのでしょうか。女性の場合は殺されない？日本のオホゲツヒメは死にましたが。

『金枝篇』は宗教学の古典で、いろいろな情報が詰まっていますね。植物神を「死と再生」

に結びつけるのは、世界中で広く見られます。エリアーデも『大地・農耕・女性』などで繰り返して取り上げています。インドのヤクシャ、ヤクシニーは殺されて復活することはないようです。その点で、ハイヌヴェレやオホゲツヒメとは直接、結びつかない神々でしょう。「死と再生」の儀式は宗教的な場面だけでなく、王権とも関係があります。王もその権力の刷新のために、儀礼的な「死」を周期的に行うことがあります。そのあたりのことはマルク・ブロックの『王の奇跡』（刀水書房）に取り上げられています。

10月25日の授業への質問・回答

インドの彫刻の女性像は、いつ見てもポインポイン（死語）でセクシーだなあと思っていましたが、セクシーだと思う理由が、あのしなやかさにあることにあらためて気がつきました。無意識下にあった感覚を言葉にして認識し直すと、意外なものが見つかりますね。よく考えれば、ミトゥナは彫刻の中の一部なのですよね。寺院の中でもどう位置に配置されているかが気になります。全体の中での配置から考えれば、どういう意図で置かれているのかがわかるのでは？

前回の授業のスライドは、女性像とミトゥナばかりでしたが、とくに後半はしなやかな体の動きを持った作品が多く見られ、前半の比較的硬直した姿勢とは対照をなしていたと思います。人物像、とくに女性像でポーズが重要なことは、現代の写真や絵や彫刻でもそうですね。カジュラホはミトゥナ像ばかりが有名ですが、じつは西インドや中インドのヒンドゥー彫刻のひとつの頂点をなしています。個々の彫刻に見られる体の動きのヴァリエーションや、その集合体である寺院全体から生み出されるリズムなどは、圧倒的な迫力を持っています。これは現地に行って、直接寺院と向かい合わなければわからないのですが、前回の授業ではそれを少しでも感じてもらえるように、長々と前半のスライドをしました。寺院全体の配置の問題は、寺院のプログラムといわれ、彫刻や建築を考える上でとても重要です。たしかにミトゥナ像の位置を全体からとらえることで、その意味が見えてくるかもしれません。しかし、私自身、よく調べていないのですが、過去の研究で、それを明らかにしたものもないようです。そもそも、ミトゥナ像の持つ意味も、前回の資料で示したように、研究者によって解釈はまちまちです。

インドの彫刻では体がくの字になっているのばかりで、日本の仏教彫刻にはあまり見ないので、おもしろいなと思いました。はじめに見た寺院の彫刻の中のシンプルな女神が、菩薩に似ているように見えたので、よけいにそう思いました。タミルナドゥの寺院の色がきれいでいいなと思いました。一度インドへ行ってみたいです。

体が腰のあたりで「くの字」になっているのはそのとおりで、さらに首のあたりでも、もう一度反対側に曲がり、全体で三つとなります。そのため、このようなポーズは伝統的に「三曲法」(tribhanga)と言われ、インドにおける優美な女性像の代表的な形式となっています。日本の仏像ではあまり顕著ではありませんが、コメントにあるように、一部の菩薩像（とくに観音像）に見られます（法華寺や向源寺の十一面観音など）。インドのヒンドゥー寺院はいいですね。日本人にとってインドといえば仏教なので、旅行会社のツアーは仏跡参拝ばかりですが、遺跡よりもこのような「生きた寺院」の方が圧倒的におもしろいです。わたしもラジャスタン、グジャラート、マドヤプラデーシュ、タミルナドゥなど、インドのあちこちのヒンドゥー寺院を見て回りましたが、どこ寺院もそれぞれ個性的でよかったです。ラジャスタンのバタンの階段井戸などは、今でも鮮烈な印象が残っています（わたしのHPのアジア図像集成の中に写真があります）。ぜひ、ヒンドゥー寺院を見るために、インドに行ってみてください。

自分が人物の絵を描こうと思うときも、できるだけ、動きのあるポーズで描きたいと思うので、人体表現で、ひねったようなポーズをしているのは納得です。日本の神様では、あまりひねったポーズはしてないですね。くびれに自信がないからでしょうか。

前回の授業で「なぜミトゥナ像？」に対する答えとして、制作者が表現したかったからという、いささかこじつけ的な回答を考えましたが、そういうこともあったのではないかと考えています。芸術家が人体表

現のいろいろな可能性を追求していくと、普段の生活では絶対とらないようなポーズを表現したくなるのではないのでしょうか。それがもっとも多く含まれるのが、性行為の場面であるというのは、実証することは難しいのですが、インドではあり得たのかと思います。日本の浮世絵や春画の場合も同様です。もちろん、春画は性的な絵画を求める人々があったからこそ成り立つ作品ですが、芸術家からすれば、人体表現に関する自分の力量を発揮できる格好な題材だったからでしょう。前回の授業で、人間が特殊な体の動きをする例として、現代であればスポーツと言いました。そのときに念頭にあったのは、たとえば、ナチス時代のベルリン・オリンピックの記録映画『民族の祭典』（全体は『オリンピア』で、その第1部）です。その冒頭では、各種の競技を行っている選手たちが、ほとんど裸に近い姿で、まるでギリシャ彫刻が動いているような映像が続きます。ちなみに監督のレニ＝リーフェンシュタールは、戦後、カメラマンとして作品を残しますが（アフリカを題材とした『ヌバ』）、彼女が撮影したポートレートには一貫とした人体美があります。

インドの人の絵はすごく平面的で、シンプルな感じがするのですが、像になるとすごく肉感的で、動きがあるので、イメージが変わります。ああいうポーズの像を作る場合、人体の仕組みがわかっていないとバランスの悪いものになってしまうそうですが、インド人の人体への興味は、医学的なものに対しても向いていたのでしょうか。

インドの絵画と彫刻で、人体のリアリティさがまったく異なるのは、たしかに不思議ですね。絵画については、あまり古い時代のものは残っていないのですが、アジャンタの壁画や、写本挿絵に見られる絵画はたしかに平面的で、立体感を感じさせません。ネパールやチベットの絵画はインドの影響を受けていますが、そこでも同様です。細密画では、さらに顕著ですね。医学的な知識と人体表現は、必ずしも対応しないようです。たとえば、日本の場合、江戸時代にはきわめて正確な解剖図が描かれていますし、その源流には、死体が腐乱していく過程を描いた『九相詩絵巻』という絵巻があります（これは授業で取り上げる予定です）。その一方で、江戸時代の浮世絵や春画は、身体の一部を誇張したり、デフォルメした表現をとります。人体に関する科学的な知識は、芸術には反映されないのです。インドの場合、人体を写実的に（あるいは解剖学的に）表現しようとした例がまったくありません。医学の知識は、解剖学にあるのではなく、体質を規定する三つの要素を基礎とします。これは血液や内臓のような明確なものではなく、もっと観念的なものです。三つの要素のバランスで体質や病気の原因が決定されます。ここでも芸術と医学は結びついていないようです。

世俗化されたヤクシーが、男性との関係によってふたたび神の世界へ戻るのはなぜでしょうか。むしろ、もっと世俗化が促進される気がするのですが……。ミトゥナはけんかしていたり、ラブラブだったり、無理やりだったり、面白いですね。今も昔も男女の関係は変わらないものですね。

神から人へ、そしてふたたび人から神へ、というのが、前回のまとめのひとつですが、その理由は私もよくわかっていません。明確な理由をあげることができないまま、とりあえず図式化してみました。むしろ後半については、神々の世界にも世俗化されたイメージが投影されると見るべきかもしれません。今回は、神話の世界の女神のイメージを取り上げますが、そこで見られる神話は、神々の世界がわれわれの世界にまで降りてきているような感じがします。ヒンドゥー教の神々が、ヴェーダの時代の神々と異なり、人格神で、恋人や妻、そして子どもを持つという「世俗化」された存在であるからかもしれません。今回、もう少し考えてみたいと思います。

インドの美術では、女性が重要視されているように思えましたが、現実では、女性の地位や権利はどのよ

うになっていたのでしょうか。やはり、他の国と同じで、まるで奴隷のような扱いだったんですか。そうでないなら、像としてあんなに美しく（たぶん当時の理想の姿だったんですよね）作られるものの対象なのに、性的とかでしかないのかと、思えてしまいます。

中世のインドでの女性の地位は、たしかに高くはありません。寺院の中での女性像の位置づけや、神話の中の女神の重要性が、現実の女性の地位や社会的な役割と対応していないことはたしかでしょう。男性にくらべて女性の地位が低いことは、『マヌ法典』などからも明らかです。しかし、カジュラホなどの女性像は、けっして性的なものとしてのみ作られたのではないと思います。「それならば何のため？」と言われると困るのですが。

高校の倫理の授業で「ダルマ」は習ったのでなつかしかったのですが、「アルタ」や「カーマ」にはふれませんでした。ヒンドゥー教美術を世界史でふれたときも、エロスやグロテスクを表した美術は教わらなかったです。ヒンドゥー教美術観をあらわすものであるならば、もっと詳しくエロスやグロテスクにふれてもよいのではと思いました。今の日本の考え方（エロスに対する）だと難しいとはおもいますが……。高校では無理でしょう。インドに限らず、日本の美術でも北斎や歌麿を取り上げても、その春画を高校で教えるわけにはいかないと同様です。そもそも、インド美術の「エロス」や「グロテスク」を、学問的に（たとえば比較文化的に）あつかった本もまったくありません。「秘の美術」とかのタイトルで、興味本位で扇情的な内容のインド美術や東洋美術の本はありますが、私が授業でやっているような内容とはまったく違います。結論や定説があるわけではなく、試行錯誤なので、毎回なかなか難しいのですが……。

ガンダーラの方がもっと人間的で生き生きとしているかと思ったらそうでもなかったのが驚いた。カジュラホが特別なんだろうか。カジュラホはすごくなまめかしいが、見ているといやらしさよりも、なんだかほほえましいような気分になった（ラブラブなカップルを見ているようで）。

私も、ガンダーラの「交歓像」の方が、カジュラホの「ミトゥナ」よりも卑猥な印象を受けたので、最後に紹介しました。カジュラホは実際に現地で見ると、さらに自然に見えます。寺院が神々で覆い尽くされて、その全体が息づいているような感じです。授業でリズムといったのは、この生命のようなものが脈打っているリズムのことです。「いやらしさ」などは微塵も感じませんでした。もっとも、それは人によると思いますし、私の場合、当日はいかに短時間でたくさんの写真を撮るかに一所懸命で、ゆっくり見ている余裕がありませんでした。

11月8日の授業への質問・回答

カーリーが「血を呑む」というところで、以前、女性と血は出産で結びつくという話を読んだことがあります（宮田登の本で、日本の吸血する女性の話ですが）。出産で貧血＝血を欲する＝女が血を吸うというイメージらしいですが、カーリーの場合はどうでしょう。あと、臍からブラフマーが出てくるのは、臍の緒のイメージと関係するのでしょうか？ぱっと見て、今日、ふと思ったので…。赤ちゃんのガネーシャかわいいですね。あんなに小さいころから象頭だったのですね。

宮田先生の説は面白いですが、インドの場合、あてはまらないような気がします。インドの女神は出産のイメージとはあまり結びつきません。シヴァとパールヴァティーの子どもが、ガネーシャやスカンダということになっているのですが、パールヴァティーが産出した物語などは伝わっていません。どうも、そういうものを抜かして、家族関係を結んでいるようです。さらに、カーリーの場合、むしろ、出産や母性とはかけ離れたイメージです。聖母ではないのです。出産で貧血＝血を欲する＝女が血を吸うという図式は、合理的なようにも見えますが、血のもつ宗教性や神秘性は、そのような合理的な解釈とは次元が違うのではとも思いました。だいたい、血を吸ったからといって、貧血が治るわけではないですよね。むしろ鉄分を補給すべきところでしょう。臍の緒とブラフマンは、おそらく関係あるでしょう。蓮の花に乗っていることも重要で、インドでは蓮は母胎です。ガネーシャの子どもというの、ときどき見るのですが、赤ん坊の絵はめずらしいです。小さいころは人間で、途中で象頭になったという神話もありますが、それも、けっこうシュールですね（自分や隣の人が、突然、象頭になっていたりするとこわいです）。

先週のみトゥナが 10、11 世紀だったので、同じ時代の西洋のことを少し考え合わせていくと、そのデザインや、彫刻の配置の違いに、とても驚きました。西洋では 10、11 世紀には女性をわりと貧相に描き、ポージングも派手なものではなく、原則、頭巾着用、裸なんてもってのほか！なのですが、それとくらべると、インドの女性像はたいへん肉感的ですね。西洋（絵画）では、また、人物の配置やポーズは、とくに寺院などにおいてはどこに何を置くかだいたい決まっているし、持ち物も決まっているのに、インド彫刻はわりとフリーで、自由にポーズを取らせたり、生き生きと描いているところに、新鮮を感じました。当時の西洋美術とくらべると面白いですね。たしかに、中世ヨーロッパの絵画は驚くほど貧弱です。ルネッサンス以降の芸術品を見慣れたものには、まさに「暗黒の中世」です。それに対して、インドのレベルの高さは、すごいことだと思います。カジュラホなどの彫刻も、エロティックな作品ばかり取り上げられますが、全体の持つ圧倒的な迫力は、おそらく、この時代の世界の美術の最先端をいくでしょう（ただし、日本も平安初期には良い彫刻がありますが）。図像のきまりごとですが、インドでも神の像に関しては、かなり厳密に定められています。カジュラホやアンビカー寺院で見られた自由なポーズの女性たちは、基本的に在俗の人々で、神ではないから、それにとらわれないのです。宗教美術のあり方を考えると、形式というものが重要な要素となります。

女性の方が残忍だという話はよく耳にしますが、インドの女神はまさにそれですね。完成された美には冷たさのようなものを感じますが、それもインド女神的なイメージなのでしょう。象の生皮は大黒天（忿怒形）を思い出します。多臂の像はインドのみだと思うのですが、実際にありえない姿だけに、やはり、グロテスクであるように思います。多臂の女神マヒシャースラマルディニーは、やはり美とグロテスクの象徴だと思います。

女性の方が残忍かどうかはわかりません。私は男女どちらも変わらないと思いますし、性でそれが決まるほど、人間は単純ではないと思います。しかし、多くの美術作品や神話で、美と残虐が同居するのはたしかです。美が残虐さを伴うというだけではなく、残虐であるが故に美しいということもあるのではないのでしょうか（ゲームの主人公みたいですが）。象の生皮はシヴァが本来持っていたもので、大黒天に受け継がれます（本来、大黒はマハーカーラという忿怒尊です）。シヴァと象の生皮については神話もありますが、私はこれは一種の胞衣（えな）ではないかと思っています。多臂はどこかで取り上げるつもりをしています。密教の仏でもよく見ますし、おそらくその影響を受けた日本の神（荒神など）にも見られます。ただし、腕がたくさんあるから気持ち悪いですね、というだけではあまり面白くないので、なにかひねりを考えなければと思っています。

インドの神はデーヴァというそうですが、ブッダの親戚（でしたっけ）のデーヴァダッタ（ダイバダッタ）の「デーヴァ」も神という意味なのでしょう（「ダッタ」のいみもよくわかりませんが）。手塚治虫の『ブッダ』のダイバダッタがとてまかつこよかったので、好きでした。ちなみに、同氏の『ブラックジャック』にも人面瘡の話があります。あと、以前書いた江戸川乱歩の生き人形の話ですが、「人でなしの恋」というタイトルでした。実写化もされていて、出演は羽田美智子さん、阿部寛さん等です。

デーヴァダッタはお釈迦さんの従兄弟で、提婆達多と漢訳されます。デーヴァは神、ダッタは与えるという意味で、神によって授けられた子という意味になります。じつは、インドではごく普通の名前です。仏典の中のデーヴァダッタについては、今回の授業で取り上げるつもりです。デーヴァダッタを中心にする、まったく異なる仏教が姿を現すようです。人面瘡は星新一のショートショートにも出てきて、これも星新一にしてはけっこうグロイです。江戸川乱歩の小説については、情報ありがとうございます。今度読んでみます。

ラクタピージャを呑み込んでしまうのがカーリーだということから、暴走する生命を食い止めるのが死だという話がありましたが、そのカーリーまでもを体内に入れてしまった女神は、一体どういうことを象徴しているのかが少しわかりにくいです。死をも超越した存在になっているということはないですか。

ラクタピージャを呑み込むのは、むしろ、インドの女神の本来のあり方を示すエピソードで、生をも内包する死であり、そこから生命が生まれるというところでしょうか。これに対して、あらゆる女神を一身に収めるひとりの女神は、インドの最高神の典型です。インドでは一元的に世界をとらえる傾向が強く、古くは梵我一如にその萌芽が見られます。そこでは、世界を統合するものはブラフマンという抽象的な原理でしたが、中世には人格神となります。デーヴィーマーハートミヤの場合、さらにその役割を女神が受け持ちます。男神よりも強力で、世界をすべて包含するような存在です。そこでは生も死も、そして時間も空間も宇宙も、すべて女神の中に没入します。このあたりは、宿題の文章の前半も参考にしてください。

美人の女神から生まれたカーリーが、どうしてあんなに醜いのでしょうか。カーリーの絵は、どれも滑稽に見えます。逆に、にこにこしながら殺しているマヒシャースラマルディニーの絵は、ぞっとします。

まさに、それこそがこの授業のテーマです。美しいものと醜いものが共存し、生と死が同居しているのが、インドの美術であり、さらに仏教や宗教の美術の特徴ではないかと思っています。そして、それは文化の違いによって、さまざまな現れ方をします。そこに「滑稽」という要素（これは「笑い」などにも通じるのでしょう）が加わりますが、その位置づけはまだ私にもよくわかりません。

美しいのに残虐というのは、単純にかっこいいと思いましたが、カーリーという像を見ていると、怖ろし

いものがエスカレートすると、滑稽になるというのも実感します。舌を出して暴走するカーリーも、ほほえみながら水牛を殺すマヒシャースラマルディニーも、私にはやはり怖ろしくて、「女神」というものの印象がかなり変わりました。

たしかに、われわれがイメージする「女神」と、これらのインドの女神は、かけ離れています。われわれにとっての女神は、ヴィーナスであり、キリスト教のマリアであり、場合によっては観音様です。しかし、日本でも、以前に見た『古事記』のイザナミ、とくに冥界から帰ろうとしたイザナミは、まさにこの「かけ離れたイメージ」の女神でした。ウジがわき、イザナギに向かって、毎日、無数の人間に死をもたらそうというのですから。これはヨーロッパでも同じで、マリアに「黒いマリア」というのがいますし、魔女狩りの魔女も、女神のイメージの負の現れ方でしょう。

神々の神性を表現するのに、非日常的な情景における「体勢」を利用した、あるいはその行為自体に畏怖の念をもって神の領域としたというのが、ルネサンスにおける彫刻、創造の理念と共通したものに思えて興味深く思った。古代宗教は、女性につきものの現象を神聖なものとして恐れる傾向があるので、「血をもって浄化し、清浄な世界を生み出す」行為に、女性を登用し、激しさを増すほど美しさを持つ女神として描き出しているのは、そういった「女性」に対する当時の観念が強く反映されているのかと思った。

ルネサンスの彫刻というとミケランジェロとかでしょうか。彫刻ではありませんが、ミケランジェロによるシステーナ礼拝堂の壁画などは、多くの裸体が登場しますが、たしかに、非日常的な情景と体勢（姿勢）で満ちあふれています。若桑みどりさんもこのあたりのことをしばしば書いていて、ポッティチェリなどの14世紀の絵画や彫刻に見られた人体表現が、ミケランジェロの時代にはすでに崩壊し、破綻していることを強調していました。後半の、「血をもって浄化し、清浄な世界を生み出す」行為を女性に担わせることは、たしかにあると思いますが、そこでなぜ女性が必要とされるかについては、より具体的な理由が求められるでしょう。

カーリーの像は、他の講義で見たことがあります。色黒で舌を垂らし、怖ろしい形相でした。剣を携っていたり、神様というより悪魔の方なのでは？と少し思いました。僕は、たとえばイエス＝キリストのような奇跡を起こす神よりも、剣で悪魔の首をはねる、残酷でダーティーな女神のほうにより強い力を感じます。インドに人々にも、カーリーは非常に人気があるらしい。ダーティーでグロテスクなカーリーの「暴力」に、恐怖と同等のあこがれ、魅力を感じているからではないでしょうか。関係ないですが、胴に顔のあるやつは、中国の妖怪「刑天」と似ています。

たしかに、残酷でダーティーなものは、同時に魅力的です。人は美しいものにもひかれますが、醜いものやグロテスクなものにも、不思議なことに惹きつけられます（じつは、それはかなり危険なことでもあります）。その理由やメカニズムを、実際の作品や文献を通して探るのが、この授業のテーマです。「刑天」の指摘はありがとうございます。調べてみます。

インドの女神「ドゥルガー」の話が出てくる漫画を読んだことがあります。たくさん手に武器を持ち、シヴァ神と戦った女神というふうには語られており、そんな女神もいるのだと強く印象に残りました。だから、今回はその神話の一部を知ることができ、非常に面白かったです。ただ、気になることとして、その漫画では、ドゥルガーは戦神でありながら、慈愛の心も有していたという記述があったように思います（漫画から得た知識なので、すべてが正しいとはあまり考えてはいないのですが）。七母神が母でありながら、戦神であったという話からも感じたのですが、当時、女性は残虐と慈愛の二面を持ってとらえられる存在だったのでしょうか。

授業でもふれたように、インドの神様や神話を利用した漫画やゲームは多いようですね。それをきっかけに関心を持ってもらえるのはいいことだと思います。ただし、ドゥルガーはシヴァの妻で、シヴァと戦うことはありません。カーリーが足の下にシヴァを踏むことはありますが、その神話も戦って倒したことはなっていません（実際は、男神に対する女神の優位を表すと解釈されますが）。戦いの神が同時に慈悲を持っているという設定もよくわかります。実際、インドの神話でも、そのように説明されることが多いです。ただし、注意していただきたいのは、順序が逆になると、こんなに怖ろしいことはないということです。慈悲を持つが故に戦うのであり、それによって殺されることは、かえってありがたいことだということになるからです。この論理は、オウム真理教のポワと同じで、慈悲によって人を殺せば罪にならないと、彼らは主張していました。さらに、大義名分があれば殺してもかまわないことになり、これはもうファシズムです（戦前の日本であれば、「お国のため」、最近のイラク問題であれば「テロリスト撲滅」がこれです）。宗教が戦争に容易に結びつく論理が、ここにあります。

11月15日の授業への質問・回答

蓮華色という名前は、日本語で聞いてもきれいですね。美しいものは、何となく清浄で心のきれいなヒロインとしてまつりあげられがちですが、ここでは化け物性もあわせもっていて、新鮮なヒロインの一面をそなえてるなぁと思いました。因縁に幅がありすぎ。それくらい、比丘や比丘尼には人間らしい情欲がそなわっていたということかな。また、キリスト教と比べちゃいますが、妙に戒律の制定の仕方がずれているし、全体にフリーダムなムードですね。♡♡♡ ユダの接吻で、太宰治の「駆け込み訴え」の謎が解けました。ユダがキリストをひそかに愛していたら、素敵なロマンスですね。

蓮華というの、インドで最も一般的な植物のひとつで、仏教美術のモチーフとしてもしばしば見られます。ただし、蓮華色比丘尼の場合、もとの言葉が「ウトパラヴァルナー」（パーリ語では「ウツパラヴァンナー」）で、「ウトパラ」というのは蓮華ではなく、睡蓮です（モネの絵に出てくるあれです）。睡蓮も女性の美の譬えとして文学作品でよく見ます。たぶん、美しさがそのまま名前になっているのでしょう。その女性が神通力を持っていることでも有名なところが、仏伝の不思議なところですね。美しいものには不思議な能力が宿るのでしょうか。太宰の作品をあげてくれた方がもう一人いらっしゃいます（後で取り上げます）。私は読んでいないので、時間を見つけて読んでみます。授業の時に紹介した荒井献氏の本は、最近刊行されたもので、「ユダの福音書」というセンセーショナルな文献についての紹介で、ユダに積極的な役割を与えているところが、とてもおもしろかったです。後半には「ユダの凶像学」という特集もあり、キリスト教凶像学の勉強にもなります。ちなみに、ユダは聖書では首をつって死んだことになっていますが、その表現にもグロテスクなものが多く見られます。

蓮華色比丘尼のエピソードは、戒律に関するもので、性的な問題が多いのかと思いましたが、出家前の不幸は何のためかと思いました。でも、バラモンに襲われかけたとき、釈迦に感想を聞かれて、「熱い鉄のかたまりが…」と答えたのは何か、深い意味があるのかと勘ぐりたくなります。

蓮華色比丘尼のエピソードは、その後で説かれる律にはとくに必要がないのかもしれませんが、そのあまりの内容のすごさというか、アホらしさに驚かされます（昼メロでも、こんなに安易な設定はしないでしょう）。仏伝の中に女性はいろいろ登場しますが、その他のエピソードも含め、蓮華色比丘尼に「美と性」がもっとも端的に表れていると思い、紹介しました。バラモンに襲われたときのエピソードは、今回のはじめに回した『観仏三昧海経』への伏線です（あまり、たいした伏線ではありませんが）。

キリスト教との類似要素はおもしろいですね。仏陀（主人公／神…仏教だけであえて「神」にします）と、デーヴァダッタ（敵）と蓮華色（娼婦性もある女性）の関係性の他に、聖母（マリア、マーヤー）についての要素もあると思います。そういえば、なぜ母は信仰対象になるのに、父はならないのでしょうか。そこもつきつめるとおもしろそうです。「ユダの接吻」は太宰治の「駆け込み訴え」を思い出します。あの作品のユダはキリストへの愛と憎悪にあふれてました。まさに愛と憎しみは表裏一体ですね。

聖母もたしかに重要です。むしろ、一般にはキリストとマリア、仏陀と摩耶夫人という対比が自然でしょう。あえて、娼婦的な蓮華色に着目したのが、この授業の特色です。母なる聖なる存在が、宗教一般で重要なのは、おそらくそれ以外にも数多く見られるでしょう。インドの場合、前の授業で取り上げたように、母神が殺戮の神になるのも、そのひとつの類型かもしれません。聖母と娼婦というのも対比になりますね。ちなみに、マドンナという歌手がありますが、娼婦の姿を模した聖母というのが、その基本的なイメージで

す（少なくとも、デビューした頃は）。このような文化的背景があるからこそ、インパクトが大きいのでしょう。蓮華色比丘尼＝マグダラのマリア、デーヴァダッタ＝ユダという図式は、授業ではあまり詳しく扱えませんでした。どこかでまとめてみたいと思っています。なお、キリスト教でマリアがヨセフ（イエスの父の方です）よりも圧倒的に重要なのはたしかですが、時代によってはヨセフを重視するときがありました（エルグレコの頃のスペインなど）。私もそれを知らずに、「マリアに比べてヨセフは影が薄く、聖母子像はあっても聖父子像はない」と、以前、著作の中で書いたのですが、実際は、ちゃんとありました。知ったかぶりで違う分野のことを書くとおぼないです。

蓮華色比丘尼の話が興味深かったです。先週末までの性についてオープンなヒンドゥー教に対して、性について極端に禁欲的（半ば嫌悪？）な仏教が対称的だなあと感じました。性交がなければ、自分たちが生まれていないという感覚はなかったのですかね。

お釈迦さんは本当に女性が嫌いだったようですね。以前に紹介した「出家を決意する釈迦」の場面でも、媚態を尽くした女性たちを唾棄すべきもののように扱っています。性交がなければ生まれていないということは、もちろん分かり切っていたことでしょう。そもそも生まれてくるのが苦しみなのですから、その原因である性交は、もっとも忌避すべきだったのです。戒律のはじめに淫戒があげられているのもそのためでしょう。仏教とは輪廻を超克するための教えですから。

「勝てば官軍、負ければ賊軍」を地でいっているのですね。デーヴァダッタは、「判官鼻肩」という言葉があるように、私はやはり敗者の方が好きです。史実ではデーヴァダッタはあまり悪くない人のようですが、仏教の人を歴史的に調べる場合、対象となるのはどのような史料ですか。やはり仏典なのでしょう。ちなみに私は『ブッダ』でデーヴァダッタが死んだ際、泣いてしまいました。

デーヴァダッタについて詳しく見ることは、前回の授業のテーマのひとつでした。一般に仏教では悪の権化なのですが、その本当の姿は、授業で紹介したように「まじめな修行者、ただし少し厳しすぎ」というものだったのかもしれない。ちなみに『法華経』には「提婆達多品」という章があり、そこではデーヴァダッタが前世の釈迦の師となって登場します。むしろ、こちらが本当のデーヴァダッタの姿だったのかもしれない。仏教を歴史的に調べる場合の史料は、やはり仏典をはじめとする仏教文献です。インドの場合、歴史書と呼べるようなものがないため、古い時代の社会を知るためにも、仏教文献は重要な位置を占めます。その中で、律は豊富な内容を持っているのですが、従来、あまり歴史資料としては扱われませんでした。最近、アメリカの仏教学者で G. ショペンという人物が注目されていますが、彼の功績のひとつに、律文献の再評価があります。そこから当時の仏教僧団の実状が読み取れるからです。

仏教の戒律はじつは人間の生々しい部分からできあがっていると知って驚いたが、それをおさえて悟りを開くことが目的なので、極端なエピソードを用いているのだろうと思った。昔、テレビの特集でモナリザはマグダラのマリアを描いたものであり、妊娠しているように見えるのは、キリストの子をはらんでいるからというものがあったが、先生はどう思いますか。

戒律は極端なエピソードにも見えますが、実際のできごとを忠実に描いたものも多いでしょう。たとえ、それが荒唐無稽であったり、神話や伝承のように見えても、それを当時の人々は信じたからこそ、律という実的な文献の形で残ったのだと思います。われわれから見ると極端でも、当時の人々にとってはあたりまえのこともあったのでしょう（もちろん、フィクションや一種のエンターテインメントとしても伝えられたでしょう）。モナリザやマグダラのマリアについては、よくわかりませんが（たぶん、違うと思いますが）、キリストとマグダラのマリアが男女の関係にあったというのは、しばしば言われることのよ

うですね。事実かどうかはともかく、そのような見方を取ることの文化的な背景に興味があります。そもそも、マグダラのマリアが娼婦であったということも、聖書にはどこにも書いていないそうです。しかし、後世にはそれが常識となり、娼婦の守り神にもなります。

最後のデーヴァダッタの話を知っていると、釈迦というのは新しい宗教を作り上げた人なのではなく、既存のものを改変しただけなのだなと感じました。でも、それはイエスも同じようなものですね。当時存在した宗教を改革しようとした挑戦者といったところでしょうか。

釈迦を改革者とする見方は、必ずしも学界の定説というわけではありませんが、魅力的な説だと思います。仏教には過去仏信仰というものが古くからあり、釈迦の前にも多くの仏がいたと考えます。古い経典にも、釈迦自身の言葉として、「いにしへの仏たちが歩んだ道を私も歩み、真理に到達した」という趣旨のものがあります。キリスト教もユダヤ教との関係でとらえると、同じような位置づけになるかもしれませんが、こちらはもっと過激で、伝統的な宗教や体制と対立した結果、十字架にかけられたのでしょう。特定の民族の宗教から、普遍的な宗教へと転換するためのあつれきです。

蓮華色がバラモンに襲われそうになった話がおもしろかったです。釈迦は性行為が行われていないから罪にならないといったそうですが、これって、実被害がないとストーカー捜査に動かない現在の警察に似てますね。

そういう視点では見ていなかったの、気付きませんでした。やはり律は男性の視点から作られた文献ですね。律の作者たちにとって、蓮華色比丘尼のような存在はどのようなものだったのでしょうか。色香をもちながら男性とのトラブルにしばしば巻き込まれる比丘尼というのは、ある意味、とても魅力的だったのかもしれない。

蓮華色比丘尼の身に起きたさまざまな不幸が紹介されていたが、それらはどういう文脈を述べる過程で書かれたものなのか。「比丘のしてはいけないこと」を示すことが目的なのか、「蓮華色比丘尼の不幸に同情させること」を目的に書かれたものなのか。キリスト教との類似の指摘は興味深かった。マグダラのマリアと似た境遇の聖人に「エジプトのマリア」もいるが、それとも似ていると感じた。

蓮華色比丘尼の物語は、ほとんど律の中に現れます。その目的は、質問の中のふたつのいずれでもあると思いますし、このようなエピソードを知りたいと思う人たちのためへの一種のサービスでもあったと思います。律以外では、三道宝階降下というエピソードの重要な登場人物として、さまざまな文献に現れます。このできごとは釈迦の生涯の8つの重要なできごとのひとつとなるため、図像作品としても数多く残っています。ただし、比丘尼を表した作品は、そのごく一部です。律に出てくる蓮華色と、この三道宝階降下の蓮華色は、少し印象が異なります。むしろ、律の方がこの比丘尼の本来の姿を伝えているような感じがします。律以降はめだつた物語は伝えられておらず、デーヴァダッタや阿難のような重要な役割を与えられることはありません。エジプトのマリアは知りませんでしたが、調べたところ、たしかにマグダラのマリアとよく似ていて、娼婦の出身ですね。マグダラのマリアと混同されることもあったようです。

蓮華色比丘尼に関する逸話は、経典に書かれる古文調だとなるほどーと思うが、よく考えると、すごく滑稽な話だと思う。わざわざ仏に言う比丘尼も、それに対してまじめに答える仏陀も何やってんだと言う感じで、とてもおもしろい。当時の人々はこれらに対してどのような思いをいだいて読んでいたのだろうか。性に対して警戒心をいだいていたわりに、寺院のモチーフなどにもセクシャルなものが多いことがおもしろい。それとこれとは別問題なのだろうか。そもそも宗教というものは、性に対してとても過敏だと思う。

その一方で売春宿などを必要悪として暗黙の了解のうちに認めている。だったら、もういっそ、厳格な性規範を与えずに、基本的な性に対する理念だけを設定してしまった方がいいんじゃないかと思ってしまう。一体、いつから性は規制すべきものという観念ができたのだろうか。

寺院のモチーフにセクシャルなものが多いことは、たしかに不思議です。今回取り上げるマトウラーのジャータカ図も、ストウバのまわりに置かれていたものですが、いったい、こんなものどうしてお坊さんがわざわざ置いたのかと思います。カジュラホもそうですが、宗教と性は意外に相性がいいようです。性に対して厳格な態度を取るのは、仏教に限らず、キリスト教でもイスラム教でも見られます。その一方で、世界のさまざまな神話や信仰は、性を背景にし、それを反映させています。宗教的に重要であるからこそ、その危険性にも敏感だったのでしょうか（あまり回答になっていませんが）。

なんだか、僧の戒律は人間としてというか、生き物として不自然な感じがしますね。種を残すという意味では、性行為は欠かせないものなんではないんでしょうか。それよりも、女に不浄なイメージが多いのか。今日、いろんな律を聞いて、それができたってことは、本当にそういうことがあったんだよなぁと思いました。

種を残さないことが、仏教のめざすところなのかもしれませんし、そもそも、生き物として不自然なのが文化なのでしょう。仏教文献の中で、経や論に比べて、律はあまり研究がありません。読んでみると、こんなにも面白い仏教文献はないのですが、不思議なことに本格的な研究者は少ないのです。だれか、卒論などで律を扱うとおもしろいと思うのですが…。

阿難を無理やり出家させるなんて、釈迦も案外ひどいことをすると思った。宗教が美や悪性を含んでいるという考えがとても興味深かったです。現実の世界には美、悪、性的なものが、日常的に存在していて、それらの中で生きる人間たちの心の救いとしての宗教は、「聖なるもの」100%で成り立ちえないんだろうなと思った。

釈迦は本当にひどいです。阿難は年の若い従兄弟だったので、身内を侍従につけたかったのでしょう。律を読んでいると、釈迦が意外に人間くさいことに驚かされます。律はたいてい、誰かが悪いことをして、それをもとに条文が制定されるのですが、そのたびに、悪いことをした比丘が釈迦から叱責されています。釈迦って随分怒りっぽかったようです。美、悪、性的なものが宗教には不可欠であるのは、指摘しているとおりです。ただし、そのすべてが「聖なるもの」であり、けっしてそれと対立するものではありません。

11月22日の授業への質問・回答

女性に化物性と美性の両面を見いだすのは、都市伝説によくある夜笑うモナリザとか彫刻が歩くとか、美しく聖性をともなうものへの畏れが転化しているからではないかと思いました。でも、聖女伝などには発生しませんね。用途の問題でしょうか（神や神話という装置に意味付与して、使うのは人間ですが…）

「夜笑うモナリザ」とかのことは私はわかりませんが、なかなか不気味なものがありますね。美しいものが怖ろしきものに転換するというのは、今回のはじめに取り上げるシンハラ国物語でも共通です。美とグロテスクが共存しているというのが、この授業の基調ですので、そのあたりのメカニズムが解明できればと思います。キリスト教世界の聖女には、この「美とグロテスクが共存」は、たしかにあまり見られませんが、サロメが洗礼者ヨハネの首を所望して、実際に斬首させるところなどは、聖女ではありませんが、けっこうそれに近いイメージのような気がします。

シヴァやインドラは神でありながら、有能な人間に嫉妬するなど、なんだか、神っぽくないように思えます。それでもインドでは（とくにシヴァは）人気のある神だったと思うのですが、やはり人間っぽい神の方が好まれることなのでしょう。

シヴァもインドラもとても人間くさいですね。『リグ・ヴェーダ』には、インドラの浮気とかの物語が出てきます（いずれ取り上げるつもりです）。眼が百個あるという神話もあり、これは美人を見たいという欲求から、体中に眼が出来たというものです（先回の資料の『マハーバーラタ』でもそのように呼ばれていました）。けっこうグロテスクです。シヴァやインドラに限らず、インドの神様はおおむね人間くさいです。クリシュナなどもさまざまなエピソードを持っていますし、その中には性的な物語もたくさんあります。指摘しているように、人間っぽいから好まれるのでしょう。ギリシャ、ローマの神話の神々も同様です（印欧語族の共通の神話から派生しているから当然です）。世界中の神話を見れば、キリスト教やイスラム教の神のような、完全主義者の神の方が珍しいかもしれません。

14 頁でも紹介されていますが、リシュヤシュリンガは『ギルガメシュ叙事詩』のエンキドゥに似ていますね。もともと、森に住んでいて、しかも女によって力を失うという部分が共通しています。ただ、このふたつの持つ意味として、「力を失う」というよりも「自然（＝獣）から人へ」なのではないかと感じました。その変化によって、雨などの自然的な力が失われているように見えますし、どちらも女性との性行為の後に、人の心を持ち始めるように見えること、あと『今昔物語』の一角仙人もエンキドゥも「街へ向かう」というエピソードが共通しています。その転換に女性が関わっているというのはおもしろいと感じました。

たしかにおもしろいですね。「自然から人へ」というのは「自然から文化へ」ともいいかえることができますね。わたしは『ギルガメシュ』は読んでいないので、リシュヤシュリンガと関係があるのかはわかりませんが、地域としてはインドの隣なので、実際に影響関係があったかもしれません。時代から考えれば、『ギルガメシュ』が先行するのでしょうか。このようなつながりをたどる比較神話学というのは、おもしろい学問だと思います。

陰馬蔵相のエピソードはすごいですね。エロスには継続し続けるのが、衝動的な面がありますね。このエピソードだけだと立川流の教義みたいに、感情的（精神的）エロスをともなわない、ただの行為に近い性

交になってしまうのだと思いました。それを思えば、一角仙人は精神的なエロスと滑稽さを両方持っていますね。雨に精液というのは、大地（地母神）との交わりというイメージかと思います。エロスもグロテスクも、突き詰めるとどこか滑稽がありますね。

釈迦の三十二相のひとつ陰馬蔵相は、この先、愛染明王のところでふたたび登場する予定です。『観仏三昧海経』のこのエピソードは、たまたま最近見つけたもので、内容を見てびっくりしましたが、まさに授業のテーマにうってつけだったので、詳しく紹介しました（後で研究室で「しつこかった」という苦言ももらいました）。腐乱していく死体のイメージは、日本の絵巻の『九相詩絵巻』にも関連します。一角仙人のジャータカやマハーバーラタ版は、純粋な少年と手練手管の年上の女性という組み合わせで、これもひとつのパターンでしょう。古今東西の文学などに現れます。雨＝精液は、農耕儀礼などではむしろ常識ですね。女性である大地と男性である天空（あるいは雲）の聖婚です。

授業前半の娼婦のエピソードで、私の中のお釈迦様がぐずれました。けっこうな怒りん坊なんですね。あのお仕置きが娼婦のためになったのか疑問です。そもそも、こうした説話って、こんな感じなのですかね。一角仙人の物語については、がっつりグロテスクでした。現代ではありえないほど、精液について語るんですね。

『観仏三昧海経』のこのエピソードは、かなり特殊だと思いますので、お釈迦様のイメージは大事に持っていてください。阿難のモテモテに嫉妬したようなことを言いましたが、経典にはそのようには書いてありません。あくまでもお釈迦様は淡々としています。しかし、けっこう怒りん坊なところはあると思います。律では、何か事件が起こるたびに（事件が起こるから律が制定されるのですが）、当該者が厳しく叱責されます。阿難もよく叱られています。だから、阿難は魅力があるという人もいます。一角仙人の物語は、私はそれほどグロテスクとは思いませんでした。精液そのものも物語ではあまり強調されず、上記のように、解釈として降雨＝性交、つまり雨＝精液ということだと思います。

今日の授業の本筋とはあまり関係ないかもしれませんが、釈迦の作り出した化作というものに、興味があります。いきなり作り出されたのに前世があるのです。しかも、性格がかなり直情的（女性がご飯を食べただけで首をかききる）なのは、何か意味があるのでしょうか…。それから、化作は実体がないようなものだと思っていたので、腐っていく過程の描写にはびっくりしました。

たしかに、突然作り出されたのに前世があるのは変ですね。でも、前世では12日間、性交し続けたというのは、けっこう笑えました。化作でも腐っていくというのは、それも釈迦の幻術のようなものだと思います。まあ納得できるのではないのでしょうか。

物語に登場するものには、象徴的な意味合いを持つものが多いと思った。一角が男性の象徴というのは、わかりやすいが、稲妻もというのはなぜだろう？ 気になります。リシュシュリングが若者として描かれていたマハーバーラタでは、角も神聖なもの（エロスではないが美）という印象を受けたが、今昔物語においては、リシュシュリング（一角仙人）が老人として描かれ、角はむしろグロテスクな感じがする。その変化にともなって、内容もエロス→滑稽に変わっていて、その連動がおもしろいと思った。リシュシュリングの描写が、若者から老人へと変わったのは、いつ頃なのだろうか。

神話や物語は象徴の宝庫で、そこからさまざまな意味を読み取ることができます。ただし、その解釈が恣意的になると、学問的ではなくなるので、注意が必要です。稲妻が男性の象徴というのは、インドラ（帝釈天）や安産法のところで取り上げるつもりです。雨＝精液、降雨＝性交であれば、天から地へと突き進んでくる稲妻は、そのまま男性の象徴としてとらえられるのではないかと思います。一角のグロテスク化

は、今昔物語集で登場人物の言葉としてもあらわれたので、注意しておきました。たしかに若者から老人への変化が、エロスの内容の変化に連動しますね。『大智度論』というインドで成立した仏教の百科全書的な文献に、すでに老人のイメージの一角も登場するようなので、必ずしも日本でそうなったわけではないようです。また、紹介しませんでした、王女と結婚した一角仙人が、侍女と浮気して、王女に蹴飛ばされて頭を打って、はじめて目が覚めたという物語になっているインドの文献もあります。この素材は、容易に滑稽化するのでしょう。

『今昔物語』ではなく『今昔物語集』です。あと中国の話は震旦です。英文で書かれている遊女と釈迦の話は、仏教の無常観ともつながるのではないかと思います。いくら美しい人間でも、死ねば腐って醜い姿をさらす。そして夢中になっていたはずなのに、その姿を見て恋が冷めてしまう。そこから悟りを得て、仏道に励むという展開は、日本の仏教説話にも多いパターンですよ。

『今昔物語集』と震旦のご指摘、どうもありがとうございます。『観仏三昧海経』はもちろん、無常観を説きたかったのでしょう。『九相詩絵巻』に出てくる腐乱する死体も、その背景にある死体の瞑想や観察の修行も、いずれも同様です。それは基本的にはインドも日本も同じなのですが、その表現の方法や力点の置き方の違いがあるような気がします。日本の仏教説話から、いろいろ探し出してみてください。

一角仙人の話は何ともエロティックでおもしろかった。これが男女逆だったら、それもそれでエロスがあると思う（神通力を失うという教訓はないけれど…）。角というと鬼という感じがするのですが…鬼がどっから生まれたのか詳しいことを知らないで、関係はあるのかなとふと思いました。仏教で女性がハブにされる話を聞くと、いつも思うんですが「女ばかり悪いと思うなよ！」と反発したいのです。男が弱いんだー！女が何をしたって言うんだー！きつと修行をしている坊さんや釈迦達は、自分たちが女性に弱いダメ男と知ってがんばっているんじゃないかと疑ってしまいます。なんかどんな宗教でも（男性優位だと）そう思います。いけない考えだとは思ってます。あー。

一角仙人の話が男女逆というのは、それはそれでおもしろいと思いますが、むしろ当たり前の設定なので、一角仙人のような息の長い人気を保つことはできなかったかもしれません。鬼と一角仙人の結びつきは、あまり無いような気がします。「ハブにされる」という表現が私にはよくわかりませんが、仏教にとって女性が危険な存在であるという考え方は、たしかに根強くあります。仏教を支えたのが、歴史的に考えて圧倒的に男性たちであったからでしょう。この 20 年ほどの間に「女性と仏教」というようなテーマの研究が続々と現れましたが、そのなかでも「男性優位主義の仏教」というのが、しばしば取り上げられています。私自身も、この授業で「男性から見たエロス」というような視点に陥らないように気を付けなければと思っています（けっこう難しいのですが）。

娼婦と化作の話を書いて思ったのは、仏教では性行為を禁じながらも、それが持つ功罪を身をもって知らない、会得できないものなのだろうということ。娼婦が快樂におぼれ、それにとまなう地獄を知り、やがて来る死を身をもって知った後に、シャカの手により仏教に皈依することになる。おそらく釈迦はこの過程がなければ仏教を会得することはできないと知っていて、ここまで（化作を殺して腐らせる）させたのだろう。話は変わるが、仏教の目的が世俗の煩惱を断って、極楽浄土へ行くことなら、その究極は人類の滅亡だ。そういう考えを持っている人がいるのはおかしくないが、釈迦もまた、人間を憎み、人間が世界から消えることを望んで仏教を作ったのだろうか。それとも、人が煩惱を断てないことをはじめから知りながら仏教を作り、戒律を作ったのか。前者の場合、人は浄土へ行けるが滅亡する。後者の場合、浄土へ行けないが滅亡もしない。それとも、娼婦のように現世で救われない人だけを救うのが仏教なのか。た

ぶん、そうだと思う。ただ、長く生きていれば誰もが生きることの苦しみ、宗教に救いを求めたいという心理は生まれるだろうが（たとえ信仰するにはいたらなくても）。誰もが救い求めるのが人間なら、やはり仏教は究極的には人間の存在を否定するものなのかなという疑問がおこる。

いろいろ考えて書いてくれて、それはそれでいいと思うのですが、すこしペシミスティックすぎるような印象を、私は受けました。釈迦が「人間を憎み、人間が世界から消えることを望んで仏教を作った」ということはありません。仏教の基本は慈悲ですから、われわれ衆生への限りない慈愛の心を持ったのが仏です。大乘仏教では、すべての衆生が悟りを得るまで、みずからを犠牲にして、衆生救済につとめるというのが、菩薩の理想でした。また、極楽に往生しても、人類は滅亡するわけでもありません（ちなみに極楽往生は浄土教なので、仏教全体からみればごく一部の教義です）。悟りを得ることは、人間が滅亡することではないからです。「人が煩惱を断てないことをはじめから知りながら仏教を作った」こともありません。そのような見の狭い宗教が、これほどまでに信者を集め、現在に至るまでも信仰されることはありえないでしょう。愚かな人間が宗教にだまされていると思われているかもしれませんが、それほど人間は愚かではないと思います。たとえ、それが千年前、二千年前の人間であってもです。授業ではあまり仏教の教義を取り上げませんが、仏教の思想や哲学は現在でも十分意味のある内容を持っています。

「苦行＝女性と交わらないこと」というのは、性を規制する宗教として自然な姿に思えますが、それが雨が降らないことにつながるのが不思議でした。雨は生きていくのに必要であるから、苦行に対してごほうび的に与えられてもいいくらいに思うのですが。むしろ女性と交わることで雨が降り出すのが意外です。生きていくことと性がつながっているということなのでしょうか…。

インドでは苦行というのがひとつの修行の方法となっています。これは歴史的にも非常に古く、ヨーガや瞑想とも関係します。苦行のひとつのパターンとして、身体と精神のコントロールがあります。性欲の抑制はまさにそのコントロールの基本となります。それによって、体の中のエネルギーもコントロールでき、宇宙のエネルギーもコントロールできます。サンスクリットで苦行というのはタパスというのですが、この言葉は熱という意味も持っています。苦行によって体の中に熱が発生するのです。女性と交わることで雨が降るのは、人間がコントロールする力を失い、自然が本来の力を取り戻すということでもあるのでしょう。ごほうびという発想は、私にはありませんでしたので、むしろその方が意外でしたが…。

・リシュシュリングの話で「自己を制することを忘れ、神通力を失った」とありました。ここは私は少しかわっていると思いました。「自己を制することを忘れ」と、神通力が暴走したとつながるのが自然な気がするからです。忘我に至るほどのショックなら、その後、父上仙人に理路整然と話しているのが不思議な気がします。

・リシュシュリングは王女を「男」だと思っていたのに、キスをしたり交わったりすることに何の抵抗も感じなかったのだろうか。たとえ治癒のためだったとしても、苦行を行っていたのだから、戒律はしっかりとたたき込まれていたはずだと思うのだが。

どちらの方の指摘ももっともだと思いますが、なにぶん、お話なので、大目に見てください。

11月29日の授業への質問・回答

本当に日本の絵巻物って暗いですね。餓鬼気味悪いって思いますけど、これって、私たち自身なんですよ。今生の行ないで来世が決まる、六道のどこに生まれ変わるかが変わってくる。明日は我が身かもしれない餓鬼を、こんなに多く絵にして残すところが日本人の暗さというか、怖いものをブラックユーモアにしてしまう滑稽さが出ていると思います。日本人らしいですね。

前回は餓鬼草紙しかお見せできませんでしたが、これに地獄草紙と病草紙が加わると、もう、だんだん麻痺してきて、何が気持ち悪いかわからなくなります。とどめが九相詩絵巻です。「餓鬼が私たち自身」というのはそのとおりです。それは来世のことではなく、この現世のことでもあります。人々が飢えに苦しんでいるのは、長い歴史の中のほとんどの時代です。現代は違うと思うかもしれませんが、アフリカの飢饉などを考えれば、今なお、それは続いています（それにしても、現代の日本人が食べ物を粗末にするのはすさまじいですね。来世はみんな餓鬼になるでしょう）。手や足は棒きれのようにやせて、その一方で、おなかはボールのように丸くふくれるのは、極端な栄養失調の症状です。とくに子どもに顕著に表れます。餓鬼草紙が描かれた時代の京都は、まさに絵巻の中の光景がいたるところで見られたはず。地獄草紙の拷問や殺戮も、この世のできごとです。これらの絵巻のリアルさは、現実のものだからこそ可能だったと思います。その一方で、絵巻の中の餓鬼がどこかユーモラスで、滑稽感を漂わせているのも不思議です。「哀れさ」を感じるという感想も多く見られました。これまでも見てきたように、グロテスクさを徹底させると、どこかで変換が起こるようです。

日本の話に入り、今日は日本史を勉強している自分にとっては興味深かった。平安末期から武家社会に入り、鎌倉にこれらの作品が書かれたが、餓鬼、地獄、病といったグロテスクな面が描かれた背景には、六道思想や、繰り返す輪廻から逃げられない心の叫び、痛みを感じ取れた。やはり、これらの作品は旧仏教の僧侶によって描かれたものなのか。「～草紙」については、作者、時代背景、地域等、地理学、歴史学、民俗学など、多くの分野と結びついており、当時の「悪」「ケガレ」「罪」を考える上で大事な作品なので、もっと知りたいと思った。

私も日本史が好きなので、授業の素材も日本のものを取り上げることが多いです（専門はインド仏教ですが）。絵巻物の研究はたしかにさまざまな分野にまたがります。仏教美術史という分野そのものが、宗教と美術の両分野を基礎とする学際的な研究領域です。かつて日本史では、文字で書かれた史料が研究対象となり、絵巻物などの図像資料はほとんど扱われませんでした。近年ではその資料的価値が再認識され、多くの研究が出てきています。絵巻物はその中でも、学際的な研究の中心的な位置を占めています。六道絵などが生まれたのは、いわゆる旧仏教の方です。鎌倉新仏教はあまり芸術作品の制作に意欲を見せませんでした。これは、一種の保守化で、キリスト教でも宗教改革のプロテスタント側に、美術作品が少ないことと似ています。

シンハラ国の話が『観音経』に引用されていますが、シンハラ国の話が先にあり、それを『観音経』が取り込んだのでしょうか。羅刹といい、先週出てきた女性を懲らしめるために釈迦が遣わした美青年といい、人間は美しいものに弱いようです。しかし、今回のような餓鬼草紙や地獄草紙のようなグロテスクなものも好きだったり不思議なものです。美の中にグロテスクを見いだすことができますが、グロテスクの中に美を見いだすのは難しいような気がします。どうなのでしょう。

シンハラ国の話が先にあり、それを『観音経』が取り込んだというので正しいです。『観音経』は『法華経』「普門品」が独立してできています。『法華経』そのものが段階的に成立し、「普門品」はその最も新しい層に属します。シンハラ国物語を知っているという前提で、あの一節は加えられたのでしょうか。知らなくても経典の意味は理解できますが、実際に浮彫などの作品を作った人たちは、当然、それを知っていたはずで。美とグロテスクの問題はむずかしいですね。だから、授業でも取り上げているのですが……。絶対的な美とかグロテスクというのは、おそらく存在しないでしょう。ひとりひとりでも微妙に違いますし、インドと日本のように、まったく異なる文化では、明らかに違います。美を見るのもグロテスクを見るのも、非日常的な視覚体験であるという点では共通します。それは、宗教体験における視覚体験ともどこか通じると思います。崇高なるものは美しくもあり、場合によっては恐ろしくもあるからです。私自身は、グロテスクの中にも美を見いだすことはあると思っていますが、そのあたりは皆さんもよく考えてください。

餓鬼草紙は気持ち悪いなと思ったんですけど、気持ち悪いと思いながらつつい気になって、見たくなくなってしまうんですね。ホラー映画のような。今、学校へ来る途中の道にタヌキの死体があります。見たくないなと思いつつ目がいてしまいます。だんだん腐っていく様子を見たくなるのは、死後の世界への関心があるからかなと思いますけど……。高貴な女性の死体を観察した絵がありましたよね。

「怖いもの見たさ」という感覚は、おそらく人間に共通してあるのでしょうか。授業でも言ったかもしれませんが、人間の五感の中で、視覚ほど冒険ができる知覚はありません。触覚や味覚など、あまり危ないことをすると、命を落としますから。タヌキの死体は私もその前日に見ました。ネコかイヌかと思ったのですが、タヌキだったんですね。高貴な女性の死体が腐るプロセスは、宿題の文章でも取り上げ、今回の授業でも詳しく見る予定です。『九相詩絵巻』といいます。

地獄草紙や餓鬼草紙は小さいころ、墓参りに行ったお寺で見たことがあり、その日の夜は怖くて眠れませんでした。でも、今日見て思ったのは「餓鬼がかわいそう」ということでした。彼らはあそこまで苦しめられなければならないようなことを、生前に行ったからあんなったのですか。それとも、人は死ねばみんなまず餓鬼になるという考えなのですか。いいことをした人はすんなり天国に、悪人は地獄に……。というイメージがあったので、すこし気になりました。あと、どうして餓鬼は排泄物を食べるのですか。食べ物や酒、水ならまだわかるのですが、なぜ排泄物を食べるのでしょうか。

あまり小さいころに地獄絵などを見るのは、トラウマになって良くないでしょう。ある程度、大人になっていろいろな意味で成長してから（場合によっては鈍感になってから）見るべきです。「餓鬼がかわいそう」と思えるのは、大人になった証拠ですね。餓鬼草紙に描かれている餓鬼については、典拠となる経典があります。それぞれ、どのような行いをしたから、このような餓鬼になるという説明があります。すべての人が餓鬼になるわけではなく、あくまでも六道輪廻のひとつで、しかも、地獄などよりははるかにましです。排泄物を食べることに、多くの人が疑問を示しました。このあたりは、私もよくわかりませんが、排泄物に対して、人間が関心をよせるのはけっして珍しいことではなく、小さい子どもや認知症になった高齢者などには広く見られます。自分の体から排出したものは、まったく異質な物質ではないのです。ただし、そういう年齢でもなく、そのような嗜好が顕著になると、スカトロロジーとか性的倒錯などのアブノーマルな人間と見なされます。

餓鬼は本当は怖いものなのだと思うが、絵巻を見ると、どこか哀愁を漂わすものがあって感じました。絵師の人たちは、ただ怖いものとしてだけではなく、餓鬼道に落ちてしまった人間だということを考

えつつ描いているのだろうかと思った。私も鳥取の出身だが、一角仙人と麒麟獅子の関係については、そんな風にも考えられるんだなと思った。比較文化的な視点で、なんかすごいと思った。

一角仙人と麒麟獅子は、そのあいだに能が介在するのではないかと、いろいろ調べてくれました。結局、結論としては立証できなかったのですが、なかなかおもしろい卒論でした。今年の6月に、私も初めて鳥取に行きました。麒麟獅子は見られなかったのですが、町おこしなどで麒麟獅子舞に力を入れていることを知りました。なお、麒麟獅子の本物は、意外に近いところで見られます。金沢の隣の鶴来に獅子吼公園がありますが、そのなかに日本とアジア各地の獅子舞の獅子が展示された獅子舞資料館があります。それほど大きくありませんが、なかなか充実した資料館です。麒麟獅子はかなり目立つところに置いてあります。

はじめにシンハラの話で、「美しいこと」と「グロテスクというか奇なこと」が相通じているというのがおもしろかった。醜と同じく美も、討伐の対象となるのであれば、美と同じく醜も崇め拝む対象となったりするのでしょうか。

なると思います。それだから、授業で美（あるいはエロス）をグロテスクと並べて扱っているのです。シンハラ物語は『今昔物語集』で強調したように、美とグロテスクが明確に分けることができないところがひとつのポイントだと思います。「美麗ながら気疎け気」というフレーズは、その典型です。これからの授業では日本の作品や信仰を扱っていきますが、そこではグロテスクなるものが信仰の対象として重視されたことが、頻繁に登場するでしょう。

雲馬の話が興味深くおもしろかったです。もともとの話で、半分が残り、半分が逃げるという話もおもしろかったのですが、未練を残したものが振り落とされ、羅刹の餌食になるという『今昔物語集』の方が、救いを求め、一度助かりそうになりながらも、見放されたというように、未練を残すことの危うさに対する教訓が出ているように思われ、興味深く感じました。この話を読んでいて、昔の怪談に伝わるような、はじめは美女の姿で、後々本性を現すというパターンの物語を、いくつか思い出しました。あれらも「美」と「グロテスク」を内包し、また、「死をもたらす愛欲」「警戒すべき美しさ」を示唆している部分があったのでしょうか。

私もシンハラ物語の、未練を残して落馬するというモチーフが好きです。たぶん、自分でもそうなってしまうでしょう。イザナギやオルフェウスもそうでしたし、その場合は、逆にふりかえらなければ生と死の秩序がくずれてしまうような気がします。美女が怪談で重要な役割を果たすのは、たしかにたくさんあるでしょうね。雪女もそうですし、ラフカディオ・ハーンの「むじな」もそうです。だいたい、四谷怪談など、ほとんど美女が主人公ですね。新しいところでは、20年ほど前に日本中で流行した「口裂け女」も同様です。美からグロテスクへの一瞬のうちの転換や、美が秘めている恐ろしさが、基本にあるでしょう。

インドにはグロテスクな絵、彫刻が少なく、日本には多いという話だったが、日本の仏教での「死」へのイメージは、本来、不浄、けがれたものではなかった気がする。そのことと関係があるのだろうか。小さいときに茶碗を箸でたたくと、よく祖母に「餓鬼来るよ」と怒られたものです。

浄と不浄の観念は、多くの文化で宗教と結びつきます。日本の場合も同様で、不浄なものを忌避することが一般的です。おそらく、死はケガレと最もよく結びつき、さまざまなタブーを生み出しました。しかし、ケガれているから排除されるのではなく、そこに宗教的な価値を見いだすことも日本の宗教や民俗の特徴です。日本民俗学では、ハレ、ケ、ケガレという三つの概念をしばしば用います。「ハレ」は「ハレの日」

とか「ハレの舞台」というような形が今でも用いられますが、非日常的でかつプラスの状態を表すことばです。ケガレはその反対で、マイナスの方です。「ケ」はこれらの逆にある日常的な状態で、宗教的にはプラスでもマイナスでもないニュートラルな状態です。「ケ」が「枯れた」から「ケガレ」となるという解釈もあります。グロテスクを扱うときには、この「ケガレ」の概念も検討する必要がありますが、あまり話を広げ過ぎると、授業では收拾がつかなくなりそうな気がします。お茶碗をたたくと餓鬼が来るというのは、私もよく聞かされました。そのような世代の人たちにとって、餓鬼は想像上の存在ではなく、しっかり実在しているのでしょう。

ふと思ったのですが、美術作品で死の対比の性として、性交のシーンが多いのですが、出産シーンをモチーフにしたものってないですね。生＝出産だと思っていたので、少し疑問に思いました。エロスの要素が少ないからでしょうか。

餓鬼草紙には出産のシーンがありましたね。これとよく似たモチーフが、六道絵の中にも登場します。今回取り上げる予定ですが、餓鬼道ではなく人道、すなわちわれわれの世界の一コマです。これは仏教の基本にある四苦、すなわち生老病死のうちのはじめの生苦を表すものです。本来、生苦は生きていることすべてが苦しみなのですが、図像として表す場合は出産の苦しみとなります。ただし、たしかにエロスのイメージはあまりないようです。

羅刹女に気付くきっかけが、美しいが不気味というのが興味深かった。完璧すぎるものに、恐怖心をいなくという感覚はわかる気がします。あと、羅刹女の話聞いて、妖怪二口女の話思い出しました。美人の妻がほとんどご飯も食べないのに、毎日かいがいしく働くのを夫が不審に思って・・・という流れが似ているなど。

ご飯を食べない美人の女房がじつは山姥で、頭の後ろに口を持っていて・・・という「食わず女房」などの名で知られる民話ですね。たしかに、この女房は羅刹女のイメージがあります。よけいなことですが、頭の後ろの口というのは、同時に女性器のイメージも込められているでしょう。ギリシャ神話などでは、女性器に歯がある女性がいる、性交をすると男性は命を落とすというモチーフがあります。マトゥラーの雲馬王物語の浮彫で、上段で性交をし、下段で舌を垂らして食欲旺盛な羅刹が表されたものがありますが、この論理にしたがえば、上段も下段も、羅刹にとっては同じことをしているのです。「完璧すぎるものは不気味」というのも、普遍的に見られるようです。少し、話は違いますが、テントウムシとかダニとかがびっしり並んだ写真を見ると、多くの人が気持ち悪く感じるようです。ひとつひとつは別に気持ち悪くはないのですが、同じものが規則的に配列していると、ダメなようです。これも「完璧なものは不気味」のひとつの例なのかと思っています。整然とした模様はきれいな場合も多いのですが、何が違うのでしょうかね。

12月7日の授業への質問・回答

『九相詩絵巻』で死体が腐乱し、骨だけになっても、髪がかたまりになって残っていたのがすごく不気味で、印象に残った。髪は日本で昔から、最もエロスを感じさせるものとされてきたが、やはりエロスとグロテスクというのは表裏一体で、どちらにも通じるのかもしれない。それと、以前「八寒地獄」というのがあると聞いたことがあるのですが、本当に何かの文書に残っているのでしょうか。

髪の毛に不気味さというのは、たしかにありますね。宗教学や民間信仰では、髪の毛は体の部位の中でも重要な位置を占めています。髪の毛に関するタブーもいろいろあります。『九相詩絵巻』に見られたように、体が簡単に腐っても、髪の毛は最後まで残ることも、その背景にあるのでしょうか。その一方で、体の一部でありながら、切っても痛みを感じないという特別なものです（レポートの文書でも書きました）。両義的な存在なのです。『旧約聖書』のサムソンの物語で、怪力サムソンの力の源が髪の毛にあったというのは、このような髪を持つ神秘的な力に由来するのでしょうか。その一方で、女性の髪の毛のもつエロスは、それとは別の次元で宗教的な力は持っているような気がします。『グリム童話』のラプンツェルなどはその一例でしょう。そこでも性的なモチーフが長い髪の毛とともに現れます。「八寒地獄」はちゃんとあります。『往生要集』にも登場しますし、地獄絵の中には、これを描いたものもあります。でも、あまり怖そうではありません。実際は、熱い地獄よりも苦しいことになっているのですが、寒さを絵画で表現するのは難しいようです。

『往生要集』のような文字資料は、地獄などの様子の描写が細かくよく理解できるが、迫力には欠ける。一方、絵になると細かい部分は意味がわからずとも、すさまじい迫力がある。やはり、絵によって見せるというのは、そういったインパクトが重要だったのだらうと思った。漫画家は、恐ろしい絵を描くときは、自分も恐ろしい顔をしているという話を聞いたことがあるが、今回、見たような気持ち悪い絵を描いた人は、一体どのような顔をしていたのだらう。

文学と絵画の違いは、文化を考える上で重要でしょう。たしかに、文学に比べて絵画は視覚に直接訴えるので、わかりやすく、迫力もあると思われがちですが、実際はそれほど簡単ではないと思います。われわれは絵を見ていても、そのすべてが理解できるわけではありません。私もそうですが、知っている作品でも、専門の論文などを読んでから同じ作品をあらためて見ると、違ったように感じる場合があります。見ているようで見ていないことがたくさんあるのです。その一方で、文学作品は一定時間、読み手の意識を拘束しますので、より印象が強く残ることもあります。そもそも、人間は想像力を持っているので、文字から紡ぎ出すイメージの世界は、絵画のようにはじめから与えられたものよりも、より強烈である場合があります。人が本を読むのは、そういう世界を体験できるからでしょう。漫画家の顔の話は、そういうこともあると思いますし、芥川の『地獄変』などは、まさにそのような狂気にとらわれた画家の壮絶な姿が主題の作品です。でも、私の個人的な考えですが、たいていの漫画家はどんなシーンでも普通の顔をして描いていると思いますよ。

地獄絵で何度も同じことを繰り返す罰がありましたが、親より先に死んだ子どもが、河原で石を積み上げて、あと少しで完成というときに、積み上げた石を番人にくずされてしまい、また最初から積み上げていくというのを繰り返すという話があったような気がするのですが、これもその罰のひとつなのでしょう。親より先に死んだだけで、どうして罰を受けなければ行けないのかが、昔から疑問です。また、糞尿の中

に入った人をつつく蜂のような虫がいましたが、漫画『犬夜叉』にそっくりな虫（毒をもっている）がいます。また、牛頭馬頭が出てきたり、「どく（虫を三つ書いて、下に皿）毒」の儀式もやっていたりしていました。

賽の河原での子どもの苦しみですね。三途の川のほとりの情景として、地獄絵でもよく描かれますが、地獄草紙や聖衆来迎寺の六道絵には見られません。これは、親よりも先に死んだ子どもは、「不孝」つまり孝行ができないということで、その償いをしていると説明されます。儒教的な忠孝思想が背景にあり、もともとのインドの仏教には見られないものです。地獄絵は鎌倉から室町にかけて、中国の新しい形式が入ってきて、変質しますが、そのころに導入された新しい地獄です。ちなみに、賽の河原で子どもを救ってくれるのが地藏です。そのため、水子供養のような子どもに関係のある信仰には、地藏は不可欠の存在です（観音の場合もありますが）。岩を使った無意味な拷問は、ギリシャ神話の「シーシュポスの物語」が有名です。私は『犬夜叉』は読んだことがありませんが、漫画に出てくる地獄のモチーフは、当然、このあたりのイメージを参考にしているのでしょう。ジブリのアニメにも、地獄絵や絵巻物のモチーフがたくさん含まれます。

グロテスクな絵を見るにつけ思うのですが、とても怖いと思うのですが、人々が実際に来世というものを、どれだけ本当のこと・・・というか疑いなく存在すると思っていたのか疑問に思いました。今の時代でも、来世を信じて苦行を積むという方々がいらっしゃいますが、そんな感じですか。先生が、平安時代、目前には地獄絵図のような光景が広がっていたという話をされていましたが、絵を見る人々は「明日はわが身」と思っていたんですか・・・ね？

たぶん、当時の人々は本当に来世があると信じていたと思います（今だって、無いと思っている人とばかりではないでしょうし、あるかないかは、誰にもわかりません）。とくに、現世が苦しければ苦しいほど、来世に期待をつないだのではないのでしょうか。浄土への往生や弥勒の世の出現などは、具体的なイメージとして、当時の人々の圧倒的な支持を得たと思います。当時、人々の暮らしは地獄絵さながらだったというのは、正しいと思いますが、逆に「地獄絵」を見て、自分たちの日常の世界と変わらないと思うことは、あまりなかったと思います。そもそも、地獄絵は一般の人々の目に触れることはありませんし、それを見ていた貴族の人々は、やはり特権階級として、社会の上層にいた人々でしょう。

今日の絵は見ているのがしんどかったです。これじゃ、日本人が他の文化（レポート課題のインド仏教）などと比べて、極端に「死」を忌み嫌うようになるわけですね。また、今まで当たり前のように見ていたのですが、地獄（死後の世界）にも、体という概念はあるということに、少し不思議な感じがしました。一度肉体は減んで、死を迎えたのに、地獄ではまた体をえている。不思議です。この体は虐げられるためだけのものに思われますが。

地獄にも体はあります。地獄は正確には「死後の世界」ではなく、死ののちに生まれ変わった世界です。輪廻の一部ですから、天とか人とか、動物とかと同じなのです。地獄では身体は虐げられるだけのものというのは、なかなか卓見ですね。そこでは身体のもつさまざまなはたらきがすべて無視されています。筋骨隆々としたアスリートのような亡者が、地獄で筋トレをしているようなことはありませんから。それに、地獄の苦しみがほとんど身体的な苦痛で、精神的なものがきわめて少ないのも、おもしろいですね（幼児虐待者のところに少し登場しますが）。地獄の住人は精神をともなわない肉体のかたまりという感じですよ。

往生要集の中で、同性愛の男性が拷問を受けるというのがありましたが、同性愛を罪とするのはいつからはじまったことなのでしょう。それから、九相詩絵巻では高貴な女性が腐敗していく姿が描かれていて、

男性の視点から見たエロスが隠れているという解釈がありました。女性ではなく、男性の死体が腐敗していく様を描いたものはありますか。

よく知られているように（知られていないかもしれませんが）、日本では比較的、同性愛に対しておおらかでした。西鶴の『好色一代男』などでも、世之介が女性だけではなく、どれだけの男性を相手にしたかを自慢するところがあります。僧侶の間でも「お稚児さん」という形で、少年僧と関係を持ったことが、知られています。『往生要集』は中国やインドの経典に典拠を求めているので、同性愛に対しては厳格な姿勢が貫かれています。実際は、同性愛自体は問題にはされなかったのかもしれませんが。むしろ、性欲や、とくに出家僧が姦淫をなすことに対して、厳しい罰がくだされたということでしょう。九相詩絵巻の男性版は、残念ながら日本にはありません。この作品の説明はあまりおこないませんでしたが、基本的には「無常」を理解するための瞑想が基本にあります。これは初期仏教以来行われた実践で、「不浄観」といいます。実際に墓場で死体を観察しながら行ったとも言われますが、その場合は男女の違いは問題にならなかったでしょう。インドや中央アジアには、九相詩絵巻の原型となる壁画がありますが、そこでは女性ではなく男性です。あえて女性を選んだところに、日本人の嗜好がうかがわれます。

六道絵の中に、パッチワーク的な技術が使われているということですが、それはよく使われた技法なのですか。何のために行われたのですか。短歌に昔の有名な歌をさりげなく混ぜるような技法（名前を忘れました）がありますが、何か、そういった意味合いがあったのでしょうか。

有名な歌をふまえた短歌の技法は「本歌取り」というのではなかったのでしょうか。六道絵でパッチワークとかコラージュといったのは、特殊な技法ではなく、一般に見られるものです。六道絵の重要な場面は、すでに先行する図像例が日本や中国にあり、それを踏襲しているというものです。六道絵を含め、仏画は絵画なので、作者のオリジナルが発揮された芸術品と考えがちですが、そのほとんどは先行例があり、それを組み合わせて描いています。もちろん、その時代固有の表現が出現することもあります。それはむしろ例外的です。ちなみに、画家は芸術家というよりも、職人に近いと考えられます。職人は何よりも伝統を重んじます。すでに確立したイメージこそが伝統なのです。

地獄絵の炎をはじめ、赤色が目立ちます。この地獄の炎と、不動明王の火炎を比べると、後者が聖なる炎と思えますが、悪を懲らしめるという意味では、同じものとも思えますが。

不動をはじめ、明王には炎がつきものです。その表現にはかなりヴァリエーションがあり、時代によって異なります。授業でもふれたように、地獄草紙の炎の表現に近いものもあります。かわった形の炎としては、迦楼羅炎といって、迦楼羅の形をかたどった炎を描いた不動明王もいます。これは地獄絵には登場しませんが、火の鳥のように描かれます。火がどのような機能を持ち、聖なるものとしてとらえられるかどうかは、状況によると思います。密教の場合は、火を用いた儀礼である護摩が重要で、そこでは火は聖なるものであり、浄なるものでもあります。この火が地獄の火と同一視されることはないでしょう。

病草紙についてくわしいことはわからないんですけど、病気の記録という観点から、もしかしたら医学書的な役割があったのではないかと思います。あてずっぽうですが。そうじゃなくて、単に自分たちとは違うものを見て、笑いを得たいという人間が持つ汚い欲から出たものかもしれません。かくいう私も、九相詩絵巻はずっと見たかったです。ずっと前から。美だったものも腐り果てていく。生が死となるなど・・・。なんかこの前のレポートを思い出します。無意味なことを繰り返す・・・そういうのが地獄だとしたら、現実も地獄になりそうです。トリ目はビタミンA不足です。イチゴを食べましょう。

病草紙の制作の目的は謎です。たしかに医学書という説もあるのですが、詞書きや病気の種類から考えて、

どうもそうではないようです。体の不自由な人を見て笑うというのは、現代では許し難い発想ですが、残念ながら人類の歴史では、つい最近までそれが普通でした。見せ物小屋などはその典型です。サーカスのような娯楽も、基本的にはそのような要素を含んでいます。それがおかしいという考えが浸透したのは、少なくとも、人権教育や社会のモラルが広がったからでしょう。生と死の隣り合わせは、この授業の基本なので、レポートも含め頻繁に登場します。そのパターンに文化の違いを見いだしたいと思います。

地獄草紙は、小学校の頃、お寺の日曜学校という、お経を唱えて説法を聞くものに行っていて、よく見たものでしたが、この年になって見てみると、とてもグロテスクだと感じました。ただ生々しくはないので、ゾッとほしない気がします。鶏や炎はとてもリアルですが、(火とが小さく描かれているからなのか？大きく細部まで描かれていたらけっこうイヤかもしれません) けっこう人間の体はあっさりしていると思いました。あと、小学校当時から少し疑問だったのが、血の海です。もちろん入れといわれれば、とてもではないけれどイヤですが、地獄の中でのいろんな責め苦よりも、ただ入るだけなら、けっこう苦しいことではない気がします。(皮はがされたりするよりは)。血に対して、何か今の私たちより、強烈に嫌悪を感じるものがあったのでしょうか。

地獄草紙の方が、六道絵よりもグロテスクさは少ないような気がします。聖衆来迎寺の六道絵は、細部までけっこうリアルです。でも、何度も見ていると、それほど気持ち悪くはなくなり、むしろ、美しさを感じるようになります。試してみてください。血の池地獄は、古い時代にはあまり描かれないモチーフです。聖衆来迎寺の六道絵にも見られません。これは、女性専用の地獄で、女性と血との結びつきが背景にあります。経血や出産時の出血が不浄と見られたのです。不産(うまずめ)地獄という別のタイプの女性専用の地獄もあります。このような地獄は宋や元の中国で流行し、日本でも室町時代頃からの地獄絵からはじまります。『血盆経』とよばれるお経も伝わります。血の池地獄や不産地獄は立山曼荼羅にもあります。

鋭い針(剣)の山の上に美女がいて、それにむかって男性が傷ついていくという地獄の様子は、謡曲にも取り入れられていますね(作品名は忘れてしまいましたが)。その謡曲では邪淫にかられた男女が二人で落ちたとされ、誘惑する側の女性も、自分が愛する男性が苦しんでいる姿を見せられて苦しむというような内容になっていましたが、この地獄には女性側の罪人はいなかったのでしょうか。

謡曲があるのですね。作品名を思い出したら教えてください。刀葉樹に女性のためのものがあることは、今回の授業で紹介するつもりです。そこでは、女性が罪人として遍歴します。グロテスクでありながら、同時にエロスも意識した地獄絵だと思います。

性的な罪業を犯したものは、獄卒に直接、拷問を受けるわけではないという共通点があるように思えます。刀葉樹は、自身の性欲によって自身を傷つけますし、幼児虐待は、自身の子どもが虐待されるのを見て苦しみますし、同性愛は燃える相手によって苦しみますから。

それもそうですね。獄卒の手を借りなくてもいいということに、何か意味があるのかもしれませんが。

今でこそ「六道絵」は電灯など明るいところで見れるが、当時は薄暗い家屋やお堂で、ろうそくの揺れる灯の下で見ていたんだろうなと想像すると、今よりも絶大な効果(悪いことしたら地獄だよ等)をもたらしたんだろうなと思う。

地獄絵は年に一度、虫干しもかねてひろげられ、それを絵解きするという習慣が、日本各地であるようです。それを見て、とても怖かったという感想を持つ人も多くいます。これは、本来、平安貴族の風習だったようで、清少納言も『枕草子』の中で「いみじうゆゆしきことかぎりなし」(77段)と書いています。

12月19日から三日間、御仏名と呼ばれる法会があり、そのあいだ、清涼殿に掛けてあった地獄絵を、その翌日の22日に中宮から「見なさい」と言われたときのエピソードです。このような作品を見るときは、たしかに、それを見ていた当時の状況を考慮に入れる必要がありますね。

12月13日の授業への質問・回答

火おこしの絵を見たときは、まさかこれもかなと考えたが、本当にそうだったとは、驚きを超してあきれのような気持ちになった。古代インド人というのは、何でも性とからめて解釈するのが好きだな。でも、逆に言えば、現代（とくに日本だけなのか？）は、性的表現が抑圧されすぎているのかもしれない。これをどう考えるのかも面白そうだ。

本当にそうだったんですね。授業で取り上げるものは、たいてい性的なものか、グロテスクなものですから、あきらめて下さい。そろそろ飽きてきたかもしれませんが……。古代インド人が、とくに何でも性とからめて解釈するというわけではなく、人間というのはそういうものだと思います。古代の日本人も、古事記や日本書紀で見たように、性的なモチーフや性行為を堂々と語っています。現代日本で性的表現が抑圧されすぎているとは、私は思いません。だいたい、授業で繰り返して言っているように、人類史上、現代ほど性とかグロテスクなものが、日常世界に浸透していた時代はないでしょう。江戸時代の春画が強烈と思うかもしれませんが、現代のインターネットの中のことを考えれば、かわいいものです。インターネットには国境はありませんが、性的な内容を持つ出版物の扱いなどを考えると、日本は他のどの国よりも規制がずさんな国です。

天女の六道絵が印象的でした。テーマ形式に重点を置いているのですが、美しい建物の前で、汚くつぶれた天人が小さく描かれて。リグヴェーダのウルヴァシーの話に似た昔話を小さいとき、どこかで聞いたことがある気がしてならないのですが、作り直していろいろなところで残っているのですかね。

天道無常相は六道絵の中でも見応えがある幅です。異臭を放つ天人が、憂鬱な雰囲気、ほおづえをついて横たわっているところなど、なかなかシュールです。ウルヴァシーの話は、異類婚の物語の原型のようなものです。多くの異類婚の物語は、男性側がタブーを破ることで破局を迎えます。羽衣伝説もそうですし、雪女も、鶴の恩返しも同様です。異類婚がハッピーエンドで終わるのは、むしろ物語としては欠陥があり、破局を前提とすると、何かタブーを設定する必要があります。そのタブーに裸を見せることや雷が用いられることが、この物語の特徴です。

火から生まれる祭火（アグニ）というのは、不思議ですね。イザナミは火の神を出産したことによって死んでしまいますよね。そういった意味では、日本では火へのおそれみたいなものも感じられるのですが、儀式の中の火というと、また違ったものなのでしょうか。

イザナミの話は忘れていましたが、おもしろい指摘ですね。たしかに、日本人とインド人とは、火に対するとらえ方や、その宗教的な意味が違うのでしょうか。火を生むことは、インドでは祭式の起源として積極的に評価されます。火が文化や秩序をもたらすのでしょう。それと同時に、これは授業でもお話ししますが、火が自然のものではなく、命あるものとしてとらえられていることも重要でしょう。ただし、日本も火の神を生むことによって、イザナギとイザナミの国産みが一段落するということは、そこで秩序が誕生し、すでに役目を終えたイザナミには、死を受け入れることしか、選択はなかったのかもしれませんが。死の出現は秩序の誕生でもあったのでしょうか。イザナギの冥界探訪は、それを確認するための手続きになります。

水の中に火とか、水から火が生まれるなど、対抗すべきもの（例えば五行説では水は火を制すはず）が生まれてくるところに、不思議さを感じました。火と水が交わってできるわけではないのですが、男＝陽、

女＝陰で交わって子どもができますね。房中術も陰陽の交わりですよ。

陰陽五行説における水と火の関係については、他にも指摘してくれた方がいます。私はあまり意識していませんでしたが、おもしろいですね。ただし、この考えはやはり中国的で、インドではおそらくなかったでしょう。相反するものを世界の根本原理とする二元論は、中国では好まれましたが、インドではむしろ一元的な世界観が支配的でした。前回から紹介しはじめている物語や儀礼でも、相反する二つの要素が交わるという感じではなく、水から火が生まれるという一方向的なとらえ方です。その中で、仏教、とくに密教では男性原理と女性原理の統合が、悟りと結びつけられるので、特別かもしれません。また、反対物の一致というのは、宗教学者エリアーデが好んで用いる概念で、その場合、世界のあらゆる宗教的観念には、反対物の一致が見いだせることになります。

日本の九相詩絵巻は女性、インドは男性になっていますが、なぜでしょう。天人五衰や六道十王図などでも女性がメインですが……。実際、現代でも男性より女性の方が、いろいろな意味で美とグロテスクをあわせもっているような気がします。命を生むのも女性ですし……。昔からそのような意識があったのでしょうか。それにしても、火と水の関係がとても不思議です。

女性を中心になるのは、いろいろな理由がありますが、ご指摘のように、命を生むのが女性というのが、私も根本にあると思います。これは、見方を変えれば、男性よりも女性の方が完全であるということかもしれません。完全なものは美しいですし、場合によってはグロテスクです（理由はよくわかりませんが、なんとなく）。それに対して、男性は不完全で、むしろこっけいです（これもなんとなく）。生物学的に見ると、女性が完全で男性が不完全であることは、むしろ常識です。生物学の本の受け売りですが、雌雄のある生物は、はじめは女性として受精卵などの形で誕生するのですが、成長の過程で、無理やり男性に作りかえるのだそうです。XX 遺伝子のほうが安定して、XY 遺伝子は欠陥のようなものなのです（女性の方が男性よりも、平均寿命が長いのもそのためです）。授業で、エロスとグロテスクに加えて「滑稽」とときどき登場させていますが、これは不完全なもののイメージで、おもに男性像に見られるような感じもします。

地獄絵のことだが、後世になるにつれて形骸化していくというのが印象的だった。絵が描かれ始めたときと比べて、周囲に与えるインパクトというものがなくなり、絵を描くことで「何かを伝える」ということよりも、「絵を描くこと」それ自体が目的になっていったのかと思った。

そのとおりですね。「絵を描くこと」自体が目的化すると、絵の持つインパクトはたしかになくなります。それは宗教美術の一種の運命のようなものかもしれません。しかし、形骸化や形式化がつねにマイナスであるわけではないとも思います。別の話になるかもしれませんが、平安時代の絵巻物に引目鉤鼻という技法があります。これは、高貴な男女を描くときの形式化された表情ですが、その当時の人々が、本当にこのような顔をしていたわけではありません。その証拠に、授業で見た餓鬼草紙や病草紙、あるいは、有名な信貴山縁起絵巻や伴大納言絵詞などには、個性あふれる登場人物がたくさん現れます。引目鉤鼻は、わざと個性をなくした形式化した人物表現をとることで、見るものが感情移入することができたとか、高貴な人々の顔は、個性を持たせずに描くことで、その高貴さを保つことができたなどといわれます。源氏物語絵巻のような絵巻物の傑作が、ほとんどこの引目鉤鼻で描かれていることを考えると、形式化によってインパクトが失われたとも言えないでしょう。なかなか難しいですね。ちなみに、インドの宗教美術も、写実性よりも形式性が優先されます。

四苦の一つ「老」のところで、老婆が鏡を見て嘆く姿があったり、天女の絵で、若い女が水浴びをしてい

るのと、臭い老いた天女の対比があったのですが、老いが苦しいというのは女性の方がその苦しみは大きいのではないかと思います。今でも男性は年を取った方が魅力的といわれる（男は 30 を過ぎてから、とか）けど、女は 25 過ぎたらもう終わりといわれるそうです。女って損ですね・・・。（森による注・このコメントは女性の方からです）

今の日本の社会はそのような見方をする人が多いかもしれませんが、それはかなり人為的なものだと思います。だいたい、男性と女性で、年齢と美しさや魅力が、逆転するというのは単純すぎるでしょう。現代の日本は、不必要なまでに「若さ」を持ち上げる傾向があります。「若いこと」が「純粹」で「美しい」のは、ほとんど幻想でしょう。同じことを「自己中心的」とか「未熟」といえば、若いことはネガティブになります。若さを売りにするのは、現代のテレビやマスコミがすさまじいまでに低年齢化していることの自己弁護のような気がします。

安産と雨乞いの話でしたが、前回は雨＝精子＝妊娠というような話を聞いていたので、やはり雨と性的なものは深く関わっているんだなぁと思いました。

たしかに、一角仙人のところすでに基本的な考え方は示していましたね。今回の特徴は、神や仏のイメージに見られる動物を中心に、古代インドから平安時代の日本へのつながりをたどります。一角仙人では神話や物語のモチーフの伝播ですので、かなりそのつながりは明瞭ですが、今回は、動物というイメージのみが手ごかりです。しかし、そこにも一本のラインがあることを、いろいろな材料で確認したいと思います。

どうしてウルヴァシーは、ブルーラヴァスに対し、裸身を見せるなといったのですか。夫婦なら別に恥ずかしがることでもないとおもうのですが・・・。天女には男性の裸を見せてはいけないという戒めでもあるのですか。というか、天人は性行為を行うのですか。天人はどこから生まれてくるのでしょうか。人間と同様、性行為→妊娠→出産みたいな感じなのですか。

まあ、神話というか物語ですから、細かいことにはあまりこだわらずに・・・。裸身を見せるなというのは、雷で裸身を見せるための伏線でしょう。天人一般がどのように生殖行為を行っていたかは、一概には言えません。ブルーラヴァスを取り戻したガンダルヴァたちは、好色な天としてよく知られています。ガンダルヴァだからこそ、このような神話が生まれたのでしょうか。その一方で、天の世界では上の天に行くほど、性行為がどんどん簡単に（あっさりしたものに？）なるという考え方もあります。下位の天では抱き合うだけで子どもができるのですが、その上になると手を握るだけで、さらにその上では見つめるだけでと、変わっていきます。それで満足できるのだそうです。

12月20日の授業への質問・回答

火と水の関連・・・すごいですね。象系統の神々と孔雀系統の神々という図式もおもしろいと思いました。イメージの上では「火」と「死」という関連はないのでしょうか。これは火葬のイメージからきてるのかもしれませんが、今回のお話だと「生命」よりだったので。地獄の苦に水がないのは「火」より「死」のイメージが弱いからなのでしょう。どちらにせよ、「死」と「生」のイメージは「火」と「水」くらいに複雑なようですね。

2回分の授業を使って、安産法に関連する仏や神を取り上げました。どちらかというと、象さん系の方に重点が置かれ、孔雀系はあまり詳しく述べられませんでした。これについては私の『インド密教の仏たち』の第3章をお読みください。文殊を中心に死と生に関わる仏たち（およびヒンドゥーの神々）を取り上げています。孔雀が愛欲に関係あることの説明もあります。生／性と死が隣り合わせという発想は、これを書いた頃からありました。火と死の結びつきは、私自身はあまり考えていませんでした。生命力は一種のエネルギーで、インドでは特に熱と結びつきやすいため、死とは逆のように思っていたからです。でも、反対の発想もおそらく可能だと思いますので、一度、いろいろ調べてみてください。

象徴性を取り上げると、二極性や二つセットのもの、凸凹のセットはすべて性的な合致に見えてくるようで、だんだんインド脳(?)になってきたように思います。また、六牙象の牙(命)を欲しがって取ってこさせるところを聞いて、サロメとヨカナーンの物語が思い浮かびました。ラテン語にも aqua と ignis 以外の「火」と「水」の単語があれば、ぜひ調べて、インドの語彙と照らし合わせてみたく思いました。すべて性的な合致に見えるのは、なかなか、いい傾向ですね。インド脳かもしれませんが、心理学のフロイトなどもそうです。サロメとヨカナーンの物語は、はじめの頃にお見せしたヨーロッパ絵画の中にも、クリムトか誰かの作品を入れておきました。まさにエロスとグロテスクの世界です。リヒャルト＝シュトラウスのオペラに「サロメ」がありますが、サロメにエロティックなイメージを持たせる演出もしばしば見られます。水と火の語彙の話は、風間喜代三『ことばの生活誌 インド・ヨーロッパ文化の原像へー』(平凡社 1979)で知りました。インド＝ヨーロッパ語族の豊富な例がのっていますので、ぜひ参照してください。それ以外の章もとてもおもしろいです。

孔雀や象のシンボル性がおもしろかった。普賢菩薩は専門の能の授業で、謡曲の中で象に乗って出現してきたので、この授業の話とリンクしてるなあと思った。日本には象という動物はいなかったはずなので、インドから仏教が伝わってきたことが明らかに分かると思った。今のところ、謡曲に孔雀は出てこないで、今後もチェックしたいと思いました。

私は能や謡曲の知識がほとんどないので、象に乗った普賢の出てくる謡曲を知りません。そのうち教えてください。孔雀も探せばいるかもしれませんが。別々の授業の内容が偶然リンクしているのを発見するのは楽しいことだと思います。他にもいろいろあるといいですね。象が日本にいなかったのは確かですが、象のイメージは古い時代からかなり正確に伝わっていました。耳の形が袋状になるなどの変形も見られますが、けっこう本物に近いイメージです。その点、獅子や麒麟などとは異なります。江戸時代には実物の象が南蛮船に乗ってつれられてきて、見せ物にもなったようで、そこではきわめて正確な象が描かれました。

象や孔雀、蛇など、それぞれの動物の示すシンボルの話がおもしろく感じました。私は象というものに対して、神の使い、神の乗り物といったイメージが強かったので、男根の象徴という考え方には驚きました。その反面で、清純を表すものであるという二面性があるように感じられました。蛇に関しても「清」と「エロス」といった、どこか対立したものを内包しているようにも思われ、興味深かったです。また、釈迦の誕生話では、釈迦が生まれた場所だけでなく、入胎したのも脇だというのが印象深かったです。普通に受胎したものだと思っていました。

動物のシンボリズムの話は、たしかにおもしろいですね。インドの神々や仏教の仏たちを見る場合にも、どのような動物と関係するかで、その性格や出自が分かることがあります。象と孔雀以外にも、ライオンや蛇なども重要な動物です。「対立したものを内包している」というのは、宗教をとらえるときに重要な視点となります。人間はものごとを二元的（善と悪、正と負、聖と俗など）にとらえる傾向があります。宗教もそうですが、さらにそれを解消する（哲学でいえば「止揚する」）ことで、別のレベルに移ることができます。両義性などはその典型です。

象や孔雀や蛇など、信仰されたり、よく出てきたりする動物は、見た目の特徴が顕著だと思った。孔雀も登場するのはオスだけだし、象も鼻が異常に長い。キリンがいたら、絶対普賢もキリンに乗っていただろう。たとえば、ビーバーとか地味な動物は、何があっても信仰の場には出てこないのでしょうか。水と関係あるのですが。

たしかに、とりあげた動物には変わった姿のものが多いですね。キリンは想像上の動物として、中国では流行しましたが、インドにはいません。普賢はすでに象に乗っているので、別の菩薩の乗り物がいいと思います。ビーバーが地味かどうかは分かりませんが、もっと地味なネズミは、ガネーシャの乗り物になります。アフリカではセンザンコウという動物が「聖なる動物」見なされることがあるそうです。この動物は鱗状の皮膚を持っているそうで、異様な姿というよりも、両義的な存在であることが重要と考えられています。蛇も両義的な動物です。

象さんの下にいっぱいミニ象さんがいたのはかわいかったですね。この話を聞くと「もののけ姫」を連想しちゃうんですけど。あれは、シシガミが歩くたびに、足下から植物が生えてくるんですけど（でもあれは、命を吸い取っているんだっけ）。動物のイメージは洋の東西問わず、共通している部分が多いですね。シシガミに言及してくれた方が、他にも数人いました。私もめずらしく「もののけ姫」は見ているのですが（他のジブリはほとんど見ていません）、宗教学的にもなかなかおもしろいですね。そうとう気持ち悪いという気がします。 「命を吸い取っている」と「命を与える」というのが同じというのも、なかなかするどいと思います。私の持論に「殺す神」と「産む神」は同じというのがあります。それが、この授業でもエロスとグロテスクを裏表の関係でとらえる基本的な考え方となっています。

神話の要点をкаいつまんで説明してもらっているからかしれませんが、神話の登場人物の人間くささやありえなさ、コミカルだと感じてしまいます。むかしの人は「おもしろおかしい」と思ったりはしなかったでしょうか。また、今日のレジュメの孔雀明王の絵は、引き込まれますね。どことなく怪しい感じが魅力的でした。

神話は神話ですから、やはり本当は厳粛なものかもしれません。コミカルに感じられてしまうのは、私の紹介の仕方が悪いからとも思います。でも、厳粛なものであるからこそ、別の文脈で取り上げると、コミカルになることもあるようです。それはともかく、いろいろな意味で神話はおもしろいですから、関心を持って読んでみてください。私の紹介とは全然違うという印象を受けるかもしれません。それでも、だま

されたとは思わないでください。

象の足跡から蓮華が生まれ、さらにまた象が生じるというイメージは、カーリーが戦った血のクローンのラクタビージャにも通じると思った。神話に登場する動物が特定の限られたものというのはおもしろいと思った。

ラクタビージャは私は忘れていましたが、興味深い指摘です。血と蓮華も、どこか通じるところがあるような気がします。安産法のイメージと、戦う母神のイメージが共通するのですね。

「密教」と聞くと、国家が容認できない、または民衆が政府に隠れて信仰する宗教みたいなのをイメージします。その「密教」で行われる加持祈祷が、政府（朝廷）の「仕事」として行われたというのを聞いて、少し違和感を覚えました。私は「密教」なるものを理解できていないのだと感じます。

おそらく、密教をオカルトや神秘思想とらえているからだと思います。平安時代の初期に空海と最澄によってもたらされた密教は、国家の根幹的なところに関わる重要な宗教でした。鎮護国家という用語も聞いたことがあると思いますが、天皇を中心とする国家や王権が密教を必要としたのです。空海などはそのことを十分自覚して、唐にわたって真言密教を学んできたのです。今回も平安時代の密教を取り上げますが、そのようなイメージを持って、講義を聞いてもらいたいでしょう。

今日の資料の後ろのほう、象徴辞典（すみません。名前の記憶が曖昧で、正しくないと思います）は、非常に興味深かった。蛇はたくさんの意味を含んでいるのですね。蛇の姿（手足がなく、身をくねらせて移動する様子）や、何でも丸呑みにしてしまう様子を思うと、恐ろしい(?)なイメージを起こさせる象徴である方が多いと思ったんですが、それのみでなく、性的な象徴にもなりうることに驚きました。あのくねくねした感じがそう思わせるのでしょうか。以前「夢に蛇が（白？）出てくると妊娠を意味する」と聞いたことがあります。今日のこの資料を読んで思い出しました。

シンボル関係の辞典はいくつか出ていますが、私の手元にも以下の3種があります。

クーパー、J. C. 1992 『世界シンボル事典』岩崎宗治・鈴木繁夫訳 三省堂。

シュヴァリエ、J. 他 1996 『世界シンボル事典』大修館書店。

フリース、A. D. 1984 『イメージ・シンボル事典』山下主一郎他訳 大修館書店。

どれも読み物としてもおもしろいです。ただ、授業でも言いましたが、これらに載っていることは、あくまでも簡便な情報源であり、何かを論証する典拠とはならないことです。つまり、「へびは～の象徴である。この「シンボル事典」に書いてあるから」という論証は、レポートや卒論ではできません。何かを調べるときの指針程度に使うといいでしょう。へびに性的な象徴を読み取ることは、かなり普遍的に見られるようです。夢と結びつくこともあるのでしょね。

日本では普賢菩薩と遊女に深い結びつきのある作品が多くある（遊女が普賢菩薩になる）が、親しみやすい仏だったのだろうか。夏休みに京都で孔雀明王を見たが、すごい迫力だった。

普賢菩薩と遊女が結びつくのは、室町か江戸時代かだと思います。西行伝説の「江口の君」がその典型です。象に乗った遊女の姿で描かれた江戸時代の絵画もあります（有名なものとして円山応挙の作品）。遊女と普賢の結びつきも、これまで見てきた象や普賢延命法と関係があるのではと思いますが、詳しくは分かりません（昨年度と同じ仏教文化論は弥勒、文殊、普賢がテーマで、このことも取り上げました）。

1月10日の授業への質問・回答

わら人形に五寸釘というと丑の刻参りですが、ルーツ？が愛染明王法にあるとは意外でした（カーマ≒キューピッドくらいしか、今日の授業は得られないかなと思ったら・・・びっくりです）。恋愛を成就させるものが人を呪い殺すものと紙一重の関係だということは、愛と憎しみが表裏一体であることと同じなんでしょうね。愛しすぎて相手を苦しめるというのは、そういう意味で切ないです。この愛染明王法は、現代小学生がやっているおまじないともにていておもしろいです（調伏したい者の名を書いた紙を・・・好きな人の名前を書いた消しゴムを使い切ると両思いになるとか・・・）

ご指摘のように「愛と憎しみが表裏一体であること」がポイントです。ただし、わら人形に五寸釘のルーツが愛染明王法にあるわけではなく、類似の儀礼が密教儀礼の中にたくさんあるのです。とくに初期密教の経典には、現世利益的な儀礼が多数含まれていて、その中には、あきらかに丑の刻参りと同じ方法の呪詛の儀礼があります。愛染明王の儀礼では五寸釘にあたるものが矢ですが、実際に釘のようなものを用いた儀礼もあり、そこでは釘が呪術用の独特のもので、インドでは古くから呪術で使われていました。サンسكريットでキーラ kila といいます。キーラを用いた儀礼については、以前にいくつかの論文を書いていますし、『マンダラの密教儀礼』の中でも簡単に触れています。調伏とが降伏は、四種法の中のひとつとして重要で、後期密教では調伏がさらに細分化されて、さまざまな黒魔術が現れます。インドでも日本でもチベットでも、頻繁に行われたはずですが。四種法は息災、増益、敬愛、調伏の4種ですが、人間のたいの欲望はこの4つのどれかに当てはまるのでしょうか。

クルクッラーの足の下と台座の下に、動物らしきものがあるのですが、これは何でしょうか。台座の下にるのは猫に見えたのですが・・・。右端下と左端下に、骨のぶちがいがあります。これは飾りでしょうか。骨のぶちがいは海賊旗のイメージがあります。後三条天皇のエピソードは知らなかったので興味深かったです。実際に呪い殺そうとしたのか、呪いで死んだのかはわかりませんが、ここに愛染明王法が使われたことに意味があるのだと思います。それにしても人の愛欲は今も昔も変わらないものですね。作品をよく見てくれています。足の下にるのは動物ではなく、人間です。本当は死体なのですが、ここでは生きてるように描かれています。台座の下にあるのは髑髏で作った容器です。容器の中の供物とあわせて、猫のように見えたかもしれません。供物は血や内臓です。左右にある交叉した骨と同じようなものです。いうまでもなく、これらはいずれも死や死体のイメージです。実際にクルクッラーに対しては、このような供物が供えられたのでしょうか。インドの密教文献には、そのような儀礼に関する記述がたくさん見られます。この絵は私が20年ほど前に翻訳した『聖なるチベット』（平凡社）からとったものですが、特に印象的な絵のひとつです。他の人にもそうだったようで、『月間百科』という平凡社の広報誌（現在は廃刊）の中でも、同書の紹介のところで用いられていました。「人の愛欲は今も昔も変わらない」というコメントは、他にも多くの人に見られました。その通りです。人間は千年や二千年では簡単に変わりません。比較文化というのは、人間の文化の違いを研究する一方ですが、その普遍性も重要だと考えています。時間や空間を超えて、同じ人間として共感できるところに醍醐味があるのでしょうか。

わら人形の呪いとカーマの呪いとキューピッドの共通点には、納得できる。そういえば、日本でも女性を「目で殺す」とか「女殺し」「惱殺」とかかって、「殺す」という言葉が恋愛の領域で使われる。マンガでよく弓矢が心臓に突き刺さるイメージがあるが、よく考えると弓矢は男根を思い起こさせるし、心臓が女

性器だとすればエロティックなイメージだ。

恋愛感情を抱かせることと殺すことが重なるというのも、普遍的に見られるようです。殺すこと＝死と、愛すること＝生が、ここでも隣り合わせです。その介在となるのが愛染明王であり、その儀礼です。弓矢が男性器というのはありえなくはないと思いますが、心臓が女性器というのは少し苦しいかもしれません。心臓は心であり、その人格の中心にあると考えられていましたし、おそらく今でもそうでしょう。マンガで心臓に矢が突き刺さるイメージはあっても、頭というか脳に突き刺さるイメージはありません。精神や思考をつかさどるのは脳であることをわれわれは知っていますが、そこに刺さるのではないのです。なお、このような脳と心臓のイメージについては、樺山紘一『歴史のなかのからだ』（筑摩書房）で取り上げられています。

愛染法の降伏は、第2次世界大戦の時も使われたのですか。しかし、廃仏毀釈や国家神道化が進んで、元々は仏教的な愛染明王の手法がつかわれたとは少し考えにくいのですが・・・。

戦前の日本が国家神道一色だったということはありません。伝統的な仏教教団はしっかり活動していました。場合によっては神道以上に国家主義的な立場を打ち出した教団もあります。廃仏毀釈は確かに明治初期における仏教への大きな弾圧となりますが、それは地域によって程度が異なりますし、伝統的な教団の多くは、いち早く政府との結びつきを強めて苦境から脱しました。太平洋戦争末期に日本の密教寺院で怨敵退散のための修法が行われたことは有名な話です。その場合、元寇の時に実際それがうまくいったという意識も強かったでしょう。皇室と結びついた密教の修法は、現在でも行われています。たとえば、皇室で出産があるときには、おそらく日本中の有力な密教寺院で、安産祈願の修法が行われています。昔の話ではけっしてないのです。

「この像が左手に〇〇を持っているから△△という意味を持つ」という推測は、どんな研究からできているのですか。研究者によって意見がまったく違って、結局どちらが正しいか分からないという事態にはならないのでしょうか。時代がさかのぼればさかのぼるほど、人々の考え方を推測するのは難しくなると思うのですが。

仏像などの意味を探るのは楽しいことですが、ご質問のような恣意性がつねに問題になります。意味の解明には、いろいろはレベルを設定する必要があります。たとえば、経典や儀軌などの文献に、はっきりと「〇〇を意味する」という書いてある場合があります。これが図像の典拠となります。しかし、話はそれほど単純ではなく、このような意味には後からこじつけられたものが多いのです。たとえば、「観音の蓮は衆生救済の慈悲の心を表す」という記述は、仏像の入門書などにしばしば書かれていますが、どうして蓮が慈悲の心を表さなければならないのか、その積極的な理由は分かりません。別に蓮でなくても、ヒマワリでもタンポポ、あるいは花ではない何かでもかまわなかったはずですが、むしろ、インド以来の蓮のイメージや象徴的な意味を知る必要があります（おそらく、豊穡多産からくるのでしょう）。美術の分野の箴言に「はじめにイメージありき」というのがあります。何かの意味を表すためにイメージが考え出されたのではなく、イメージがつねに先行し、それに意味が与えられるという順序が一般的です。古い時代ほど推測するのが難しいのはその通りですが、そこで「人間の文化の持つ普遍性と特殊性」という柔軟な思考が求められます。研究者によって考えが違うのは当たり前で、あとはどれだけ説得力を持たせるかです。

愛染明王法と平等院や丑の刻参りがつながるものだという点に、驚きました。別に実際には後冷泉は呪殺されたのではなく、病に倒れただけなんだろうと、現代人の私は思いますが、呪術が人の心を支配していたであろう当時においては、後冷泉天のが呪殺されたという噂が広まれば、愛染明王法はすごく人々に恐

れられたでしょうね。私はあまり宗教とか呪術とかは信じていませんが、やはり呪われるのは何にせよいやだし、怖いなぁと思います。人智を越えた呪術的なものの効果は、はかりしれなくて怖いです。呪術自体よりも、それを信じる人の心の方が怖いですね。

本当に怖いのは人の心というのは、まったくその通りだと思います。皆さんの多くは、おそらく宗教や呪術とは無縁の生活を送っていると思いますし、信じていないと思います。ですから、後三条天皇の話もまゆつばと思うかもしれませんが、密教の修法がまったく効果がないものとも言い切れません。人間の持つ「思い」や「念」の力が、何らかの作用を持つことだってあるかもしれません。密教の修法は、そのようなものを増幅させるような役割をするようです。なお、皆さんの好きな血液型の性格判断や星占い、あるいは最近、流行の風水も、いずれも一種の呪術です。そうは思っていないかもしれませんが。

シヴァにはドゥルガーという妻もいたと思うのですが、女に興味がなく、パールヴァティーと結婚させるにも苦労したのに、側室（しかもあんな無骨な）がいたなんて不思議な話だと思いました。

おもしろい指摘ですが、シヴァは女性に興味がなかったわけではなく、むしろ女性が大好きなので、あえて苦行して女性を遠ざけたのです。もともと、女性に興味がなければ、苦行とはならないでしょう。苦行によってエネルギー（特にこの場合、性的なエネルギー）が蓄えられるのです。以前紹介したティロッタマーの神話でも、シヴァは好色な神として描かれていますし、インドラや金剛手とも連なる系列に属しています（つまり、象さん系）。ドゥルガーの方ですが、これも無骨な女性ではなく、絶世の美女として神話では描かれています。美女がバッサバッサと敵を倒すというのは、インドの神話だけではなく、ハリウッドの映画でも、日本のテレビドラマでも、おなじみの設定です。だいたい、そういうのが好きなのは男性でしょう。なお、シヴァの妻にいろいろな女神がいるのは、もともと単独の神として信仰されていたこれらの女神が、「大伝統」のシヴァ神崇拜にのみこまれていったからです。

愛染明王の像が小さいのには、修法を行うという実用的な目的があったのですね。なんかかなり生々しい……。最初の方のスライドで、愛染明王の持つ日輪に描かれている三本足のカラスは、八咫鳥のことでしょうか。あと、いまさらなのですが、明王は何人いるのでしょうか（愛染、不動、孔雀……）。

三本足のカラスは八咫鳥です。太陽と結びつきの深い鳥で、日本以外にも中国や朝鮮半島の神話などにも登場するようです。八咫鳥は、神武東征の際、タカミムスビによって神武天皇の元に遣わされ、熊野から大和への道案内をしたとされる三本足のカラスです。現在では熊野三山の旗やお守りに見られるほか、日本サッカー協会のシンボルマークでもよく知られています。明王は密教の時代になって登場した異形の仏たちですが、日本ではとくに不動明王の人气が高いです。五大明王というグループも重要で、不動、降三世、大威徳、軍荼梨、金剛夜叉の五尊です。このほか、大元帥、愛染、孔雀などがいますが、それほど種類が多いわけではありません。

1月17日の授業への質問・回答

今回のこの回を楽しみにしてました！天川弁才天はひとつしか見たことなかったの、こんなに数があるとは驚きです。ダキニ天についてはちょっとだけ勉強しましたが、知れば知るほど深みにはまるおもしろさがあります。皇室との関係ができていく（即位儀礼、狐＝アマテラス・・・など）の点もとてもスリリングです。「外法」たるダキニ天法やダキニ天が、いつの間にか稲荷として明るいところに現れるようになるのもおもしろい。先週の愛染明王同様、ダキニも敬愛と調伏の関係にあるのだと思う。

楽しみにしてくれていたダキニ天ですが、前回は十分な咀嚼した話ができませんでした。なぜ、ダキニ天と稲荷神が習合したのかという質問も複数、見られました。これらについては、今回少し補いたいと思います。ダキニ天の資料は阿部先生のをはじめ、いくつかあるのですが、実際にどのような場面で、どのように使われたのかが、正直なところ、よく分かりませんでした。立川流の中で位置づけられるのではないかと考えているのですが……。即位灌頂の話もその流れで重要なようです。しかし、これも難しいですね。天川弁才天は「気持ち悪い」と言って紹介したのですが、図像が小さくてどこが気持ち悪いか分からないというコメントもいくつかありました。スクリーンが教室の割に小さいので、中央の席の前の方でなければよく分からないかもしれません。今回、これもアップにしてもう一度紹介します（しつこい？）。前回の授業の趣旨を簡単にまとめれば、愛法と外法の神である愛染明王、弁才天、聖天、ダキニ天は、ひとつの大きなグループを構成していること、そこには象、ヘビ、狐という動物がモチーフとして現れること、後世になると、これらの神々が合体してグロテスクなイメージが作られること、などでしょうか。これまでの授業の流れからは、エロスの神が習合すると、グロテスクな神になるというのもポイントになります。

聖天さんと大根との結びつき、また供養が浴油法であることは、「鼻長大臣」の話から来ていたんですね。はじめて知りました。男天を鎮める観音は十一面観音ですか？以前、調べたときに何観音なのか文献が見つからず……。秘仏が見れてよかったです。まったく見るできないものと思いこんでいました。聖天と大根の結びつきは、インドでも見られます。仏教のマンドラにもガネーシャは登場し、そこでは四臂で、三叉戟、甘いお菓子、斧、大根を手にします。若干、私自身勘違いがあり、大根をラドゥッカ (laḍḍuka) と思ったのですが、これは二つ目の「甘いお菓子」に相当する語で、大根は mūlaka というのが原語です。エピソードに見られる難しい名前の解毒剤は、ラドゥッカの音訳だと思いますが、甘いお菓子を指すことが分からず、植物の一種と考えたのではないかと思います。また、図像の説明で大根を手にしていると説明しましたが、大根ではなく自分の牙を持っているものもありました。これもインドに作例や神話があります（研究室に戻ってから、インド留学経験のある卒業生と話していて、指摘を受けました）。

大臣は自分が王妃と通じていたくせに、毒を飲まされて起こって王室に乱入するなんて、わがままだ。本当なら、処刑されてもおかしくない。王様も毒なんかよりもっと直接的に殺す方法があったと思うのに。大臣が后を抱いているから歡喜天は双身だというなら、后も象頭だったことになりそうですね。そんなはずない。どうしてこの物語は作られたのだろうか。

ほんとうに、めちゃくちゃな話ですね。鼻長大臣の話は天台宗の図像文献である『阿婆縛抄』（あさばしょう）からの引用ですが、その典拠がどこにあるのかわかりません。根拠はありませんが、中国あたりで

でっち上げられたような気がします。でも、精力絶倫というか、性的なエピソードが背景にあることは、この仏の本質に関係があると思います。シンポジウムで田中貴子さんは、双身の歓喜天はインドにはないことを強調していました。たしかに、インドではガネーシャが夫婦になることはないようで、まして、抱擁しあう姿はありません。しかし、女神との結びつきは古い時代からあり、このあたりに起源があるのではないかと思います。これについても、今回取り上げます。

孔雀や象というモチーフが今まで出てきたことは多かったが、狐というモチーフがたくさん出てきたのはじめて？日本では狐は怪しい生き物ですが、仏教と関連するとどのような意味を持つのでしょうか。首が切れていて、首からヘビが出てくるモチーフはとてもグロテスクだと思いました。今までいろいろな動物が出てきましたが、それぞれに意味を持っていて、絵巻の中でどんな意味で用いられていたんだっけ・・・と思い返してみたりします。

たしかに狐はじめてです。インドにも狐やそれに近い動物がいると思いますが、特定の神や宗教と結びつくことはないようです。日本では九尾の狐のように、昔話や説話に、かなり妖しい狐が登場します。これらは中国にもさかのぼれるかもしれません。動物をたどっていくと、神や仏の世界の構造が見えてくるというのは、私が好んで用いる方法ですが、狐は少しむずかしいです。首から上がなく、かわりに蛇が出てくる天川弁才天は、ヒンドゥー教の神の図像と結びつける予定です。ただし、これもあまり直接の関係があるわけではないのですが・・・。

弁才天は七福神の羽衣をまとったきれいな女性というイメージがあったので、剣を持った勇ましい姿だったり、童子をつれていたり、他の神と一緒にいたり、首から蛇や狐が出ていて気持ち悪かったり、さまざまな姿をしておもしろかったです。とくに、最後の首がない弁才天は、とても特異でした。今までは美人さんの弁才天ですが、天川弁才天がなぜこんな姿をしているのかとても気になります。腕や足ではなく、「頭」がないことが気味悪さのひとつですが、それにも何か意味があるのでしょうか。

七福神の弁才天の姿は、琵琶を持つタイプが元になっていますが、それにさらに飛天（天女）のイメージが加わっています。このような弁才天のイメージは、おそらく江戸時代頃に定着したのではないかと思います。授業の中でもふれましたが、七福神の中のほかの大黒天や毘沙門天、吉祥天なども、前回とりあげた図像の中に登場します。じつは、七福神信仰は日本における「愛法と外法」の流れをくんだ信仰なのではないかと思います（このほかの布袋、エビス、福祿寿は仏教起源ではないので登場しませんが）。Wikipediaによると、稲荷神が七福神に含まれることもあったそうです。天川弁才天の気持ち悪さは、たしかに頭がないことによると思いますが、ハ虫類だから気持ち悪いのではというコメントもありました。たしかに、獅子や馬などの動物の頭なら、それほど気持ち悪さはないですね。ガネーシャも気持ち悪いという感じではなく、かわいいとか滑稽という印象を与えます。

ダキ二天は衆生の死ぬ瞬間の肝魂を食べるということをはじめて知ったので、意外に恐ろしい神なのだなあと思いました。ただ、日本のさまざまな古典にその名が見られるという点が興味深く、またよく他尊と習合しているというのもおもしろかったです。また、今回一番印象に残ったのは、双身歓喜天の話で、絵を見たときはその不思議な姿に驚きました。象の肉が人間にとって毒であることも不思議で、やはりそれも「象」という動物の持つシンボル等に関係しているのかと考えました。他にも象が人間にとって毒としている話はたくさんあるのでしょうか。気になります。

象の肉にまつわる物語は、私はこれ以外にはわかりません。おそらく、食べても死ぬような毒は入っていないと思いますが・・・。象はこのあいだから取り上げていますが、普賢や帝釈天の乗り物の象の場合、

とくに物語やエピソードと結びつくようなことはないようです。

私は能楽サークルに入っているのですが、今度「竹生島」をやります。しかし、竹生島が実在するとは思いませんでした。しかも滋賀ですし……。近いですね。知らなかったのは不覚でした。それから、私は昔から人を食べる怪物とかが大の苦手だったので（洋画とかでよくあるんですが）ダキニ天は本当に怖いなあと思いました。ところで、人肉を食べる風習って本当にあるのですか？

能の「竹生島」は知りませんでした。調べると、たしかに有名な演目であるのですね。登場人物にしっかり弁才天もいます。龍神も登場します。前回紹介した凶像の通りです。竹生島は琵琶湖のまわりのあちこちの港から船が出ていますが、便利なのは長浜港でしょう。JRの長浜駅から10分ほどのところにあり、船に乗っているの30分ほどです（授業では1時間といましたが、もっとはやかったです）。「弁才天象」や「弁天十五童子像」なども拝観できます。長浜から少し北の高月のあたりには、有名な渡岸寺の十一面観音をはじめ、多くの優れた観音像もあり、「観音のふるさと」と呼ばれています。あわせて一日で回れますので、行ってみてください。人肉を食べるのはカニバリズムといって、倒錯した性癖のひとつとして有名です。欧米ではよく聞くのですが、日本ではあまり取り上げられることがないですね。

へびといえば、今昔物語かなんかに、たしか、大蛇が小用をしている女性（外で小用をしてしまった）の前を見て欲情し、女性を金縛りにさせて動けなくし、ずっと見ていた（最終的には通りかかった武士に下女が訴えて助かる）といった話や、へびが女性を見て欲情し、交わられてしまった話があった気がしました。弁天の「白蛇」ですが、昔から「白蛇は神様だ」と、よく実家の祖父なんかにいわれていた気がします。民間信仰かもしれませんが、何か関係があるのでしょうか。

『今昔物語集』や『日本霊異記』にはたしかに、蛇と性行為に関する物語がいくつか見られます。人間が動物と結婚をする異類婚のモチーフでも、蛇が圧倒的に多いですね。女性が蛇の場合、蛇の子を産んでから、その家去るというパターンで、男性が蛇の場合、相手の女性が知恵を働かせることで、結婚を免れるというのが多いようです。白蛇が神や神の遣いという信仰は広く見られます。この場合、蛇であることと、白という突然変異の特徴の両者が重要でしょう。

象が二つ並んでいる聖天秘密曼荼羅が、お坊さんがオリジナリティーを出したんではないかといっていたんですが、そもそも曼荼羅にオリジナリティーっていいんですか？ 不必要というか、ルールにのっとって作るものではないんでしょうか？ 作られた目的が違うとか？ まぁ例外的なものなんでしょうか。

曼荼羅がルールにのっとって作られるというのはその通りです。とくに、金剛界と胎藏界という二つの重要な曼荼羅は、すべて、経典などの文献にもとづいているのが原則です。さらに、日本では伝えられた凶像そのものをできるだけ忠実に再現しようとしたので、画家や僧侶のオリジナルな作品が生み出される余地はありませんでした。しかし、別尊曼荼羅という日本密教固有のマンダラでは、この原則が必ずしも守られないことがあります。大多数の別尊曼荼羅も、典拠となる経典や儀軌があるのですが、一部にはそのようなものはありません。その場合、作品成立の背景に、特定の僧侶のオリジナルなアイデアがあると考えられるのです。これを「阿闍梨の意樂（いぎょう）」といいます。オーソドックスではない凶像があるときに、よくこのような理由を与えます。聖天秘密曼荼羅もその一つです。

人の心臓を食べるとすごいですね、ダキニ天は。おいしいのかな。人間の姿をしているダキニ天が、死体を解剖して、口のまわり血だらけで、手に心臓持ってるってかなりグロイと思います。そういえば、前出てきたカーリー（でしたっけ？）も敵の魔物を食べるんですね。何か、女のイコール食べることっ

てイメージがあるみたいな気が……。ところで「ダキニ天は6ヶ月前に人の死を知って、死ぬのを待って、その人の心臓を食べる」というのと、「ダキニ天は生きている人間の精魂をとって食べるから、その人は6ヶ月で死ぬ」というのがありました。ということは、ダキニ天は6ヶ月を挟んで、一人の人間を2回食べるということになるのでしょうか。なんか「死神」っていうイメージを持ちちゃいます。

ダーキニーやダキニ天は、インド密教と日本の外法をつなぐ重要な尊格と思っています。カーリーなどの「血を飲む女神」にも通じますが、もともとカーリーやチャムンダーが、人々西をもたらす民間信仰の女神として、インドで信仰されていたのです。日本の立川流とインドの後期密教を正しく結びつけた研究は、これまでありませんでしたが、共通点は予想以上に多いようです。ダキニ天が人の精魂を食べるという考え方は、屍体を食べる→死者の精魂（人黄）を食べる→人の人黄を食べるので死ぬ→人の生死を支配できる、という流れではないかと思います。2回食べるというのは、これらを一緒にするとそうなるだけで、それぞれ、独立して信じられていたのでしょう。

1月24日の授業への質問・回答

終わりにあたって

「エロスとグロテスクの仏教美術」と題した今期の授業も、無事、終了しました。いちおう、予定していた項目はすべて取り上げましたし、皆さんの出席率も良好でしたので、よかったと思います。皆さんのコメントにも「大学でこんな授業をしていいのか」というお叱りや、「スライドの絵や教員の話で不快になった」という苦情もなかったのも、それも安堵しました（匿名にすれば、あったかもしれません）。

この授業は、今期がまったくの初めての企画なので、私自身、試行錯誤でした。それでも、はじめに組み立てた授業の構成が、いちおう最後まで維持できたのは、よかったと思います。一部のトピック、たとえばマトゥラーのヤクシニーの解釈や、シンハラ国物語は、他の授業でも別の文脈で取り上げたことがあったので、二回目の方もいらっしゃったかもしれませんが、「エロスとグロテスク」というとらえ方は今回が最初です。毎回、授業の前は準備におわれ、結局、消化不良のまま授業にのぞんだこともしばしばでした。そのため、授業で話しながら、結論を考えたり、場合によっては、どこにも落としどころがなかったりということもありました。おそらく、聞いている皆さんも、「よくわからなかった」という感想を持つ回も多かったと思います。学期の途中でも言い訳したように、「今、新しい考えが生まれつつある」ということで、大目に見てください。

授業全体を通じての、私自身のねらいは以下のような点でした。

- ① 仏教美術とは相容れないような「エロスとグロテスク」のイメージを、数多く知る。
 - ② エロスとグロテスクは全く無関係ではなく、一方から他方に容易に転換する。
 - ③ エロスとグロテスクは、人間の生と死と直接結びつくテーマであり、宗教美術には不可欠である。
- 最終回の感想を拝見すると、いずれもある程度は理解いただけただようで、よかったと思います。ただし、これらは、私自身は授業の開始の時から念頭にあったねらいで、実際の授業では、それを超えるような新しい視点や枠組みを見つけないかと思っていたのですが、なかなか難しかったのが実感です。今のところ、授業の中で気になった疑問点としては、次のようなものがあげられます。

- (1) エロスもグロテスクも、容易に「滑稽」に転換するが、そのメカニズムは何か。
- (2) インドと日本で、エロスとグロテスクのあり方に大きな違いがあるが、それを明確にできるか。
- (3) 説話のモチーフや図像のイメージを、インドから日本につなげることができるか。
- (4) 根本的な問題として、人はなぜエロスやグロテスクにひきつけられるのか。

いずれも、明確な答えは出せませんでしたが、これからも考えていきたいと思っています。

私自身の反省点としては、最後の方で取り上げた日本の美術関係に、あまり深く入れなかったことがあります。私の専門と少しずれることもあって、一部の参考文献に頼ることが多く、その紹介に終始して、オリジナルな見方を示すことができませんでした。もう少し勉強して、あらためて取り上げたいと思っています。摩多羅神がマトリカーで、天川弁才天がチンナマスターという思いつきも、どこまで実証できるか関心があります。半期通して、立川流とダキニ天信仰なんていう授業もあっていいかと思っていますが、受講生にはついていけないかもしれませんね・・・。

取り上げたテーマの中で一番印象に残っているのは、ちょうど中間あたりで登場した『観仏三昧海経』のエピソードです。自分の性器を誇示する釈迦や、娼婦への一種のハラスメントは、私も今回の授業で初めて知ったのですが、驚きました。エロスとグロテスクの不可分性という、この授業の第一のテーマにぴったりの内容でした。『観仏三昧海経』は、源信が『往生要集』を執筆するときに大きな影響を与えたこ

とでも知られていて、日本の浄土教美術にも何か関係があるかもしれません（たまたま、今期は特殊講義で「浄土教の美術」をとりあげていました）。

今回の感想に「これまでに見たことのない絵や彫刻を、たくさん見ることができた」というものが多く見られました。おそらく大半の人も同じような印象をもったと思います。私自身、授業の準備で図版を探す過程で、このテーマに関する作品にはいろいろなものがあることに、改めて驚かされました。最初の回に、主にヨーロッパの美術における裸体像を中心に紹介しましたが、エロス＝裸体という図式が、いかに一面的（しばしば男性的）であるかが、授業を通してわかりただけなのではないかと思います。あわせて、東洋の美術の多様性にも気づいたのではないのでしょうか。世の中には、不思議なもの、おもしろいものがたくさんありますので、これからも広く関心を持ち、皆さん自身の研究に役立てていただければ幸いです。

最終回の質問や感想は、原則として全員の方のものを紹介しています。そのぶん、私のコメントはほとんどありませんが、この全体のふりかえりを、それに代わるものと思ってください。

からみあうヘビが多産の象徴だと初めて知りました。私はヘビが苦手、かついいイメージがないので、ヘビを避けてしまいがちですが、インドでは大切にされているのかなと思いました。生と死も、エロスとグロテスクも、全く別のものではないと私も思います。境界があいまいだから、つながりがあるように感じるのではないかと思いました。がんばってレポートを書こうと思います。

仏教芸術のエロスとグロテスクには、常に生と死の概念がひそんでいる。普段は目にすることのない作品を鑑賞することで、愛と死のつながりと対比について考えることができ、とても有意義な勉強になった。西洋芸術にはみられない、東洋芸術独特の描写は、とても強いインパクトを伴って鮮明に焼きつけられてしまったのが印象に深い。

立川流の話を知っているとエロスとグロテスクのイメージを同時にうけました。最後のまとめを聞いて宗教は人間存在をリアルにあつかうほど、エロスとグロテスクが強くなるのだと思いました。

立川流については知らなかったもので、このような流派があることに驚きました。ドクロを使う修法なんてあるんですね。ドクロを使うのはわりと一般的だったと聞いて、また驚いてしまいました。『ダ・ヴィンチ・コード』の中で、キリスト教の中でも女性と交わることを儀式とする修派があると読みますが、それと似ているなと思いました。

後醍醐天皇が立川流を行っていたことは、なんとなく知っていました、立川流が筋の通ったものであることは驚きでした。

立川流の秘儀には不気味な印象を受けた。グロテスクなエロスの行為といえる。

立川流の話は、日本史の平瀬先生の特権講義でも聞いたことがあり、そのときは驚きましたが、とても興味をひかれたのを覚えています。調べてみたら面白そうだなと思いました。私は勝手に仏教美術はとても崇高でとっつきにくいようなイメージを持っていたのですが、授業を聞いてもっと親しみやすいものなんだ

と感じました。生も死も、エロスとグロテスクも自分にとって身近に感じました。

首の取れた絵がいくつかあって、エロスとまざってすごくグロテスクさが協調されて感じました。エロスとグロテスク両方に一気に描かれていて、おもしろかったです。チベットの仏たちの絵は色彩が派手というか・・・ 西洋にはなかなかない色使いですね。

チンナマスターの首を切った後の血しぶきをダーキニー達が飲むというのにはびっくりしました。「飲ませるほうも飲むほうもすごい」と私などは思ってしまいますが、“血”というのはいよいよモチーフとして出てきた気がします。現代日本において見るとグロテスクでも、聖なる意味を持っていたのだと感じます。

授業お疲れ様でした。毎回楽しくきかせていただきました（たまに睡魔に負けましたが）。やはりダキニ関連は面白いですね。磁石みたいにくっついていくのが面白いです。先生が紹介されてた図と似たので摩多羅神といわれているのもありました。マザー説（母神説）非常に面白いと思っています。私が思うに稲荷にもそういう磁石みたいな要素があるのだと思っています。ダキニと稲荷の接点はキツネ（野干）へびとの関連も気になりますね。レポートがんばります。

天川弁才法はどこが気持ち悪いのかわからないという人も多かったようですが私もこういうのは生理的にダメです… 先生が蛇の頭の間人は平気だけど中から出てきてるのがダメとおっしゃっていましたがすぐわかります。ゾッと鳥肌がたちます。

ダキニ天法の話はすごいですね。死者のドクロが生身になったもの、ということは生首がご本尊ということになるのでしょうか。想像すると人間の生首をまつり上げるというのはちょっと気持ち悪いし異様だと思います。

半年間ありがとうございました。知識が及ばない部分もありましたが楽しい講義でした。

チンナマスターの三つの絵で、どれも性交している男女の姿が、男性が横たわっていて女性が上位で踏みつけている形なのが面白かったです。今まで見てきたものでは、女性がすごく強いイメージですね。

人形杵は実際に現在使っている人はいるのですか。あと、チンナマスターの血が三筋でてる図がなかなかこわかったです。

今日はドクロとか、男女の精液の赤白とか、想像して気持ち悪い感じが多かったです。でも女性の絵は身体のラインがきれいでした。首がない女性も多かったですけど…。

いろいろなもののシンボルがまとめて出てくると確かにすごそうだと思いますけど、もともとの（1つ1つの）権威が弱まってしまふ感じがします。そうやってただのシンボルとしてしか残らなくなった神もいたんでしょうか。

業平が歌舞の菩薩であり、多くの女性と関係を持つことでその女性たちを極楽へと導いたという話は謡曲で多々ある（今、具体的なやつが出てこないんですけど…『朝顔』とかそうだったかも？）。それは、伊勢物語の古注釈に依拠していると考えられるのだが、その考えの根底となったものが立川流などであるの

だろうか。

立川流の秘儀(?)にとっても興味を持ちました。これまでいろいろなお話を講義の中で聞いてきたからか、そこまで驚きはしませんでした。疑問に思う点が何点かありました。例えば女性の精液?が赤いといわれること。これは血のイメージを含んでいるのでしょうか。また、和合水を八年ドクロにぬりつづけると・・・とありましたが、八年間毎日ぬり続けるのでしょうか。和合水(男女)の組み合わせはずっと同じでなければならないのでしょうか。よく考えるとつつこみ所がたくさんありますね。

弁才天、ダキ二天の曼荼羅は、実に様々な要素を盛り込めるだけ盛り込んだという感じて、にぎやかだと思いました。インドでも日本でも、元々は美女としてイメージされた女神が、次第にグロテスクな姿に変わっていく例が見られます。決して美しいとは思えないけれど、何かものすごい力強さを感じます。

「立川流」はそれだけだとすごく異端な流派に見えるけれど、インドからの流れから考えるとそんなに不自然ではないのかと思った。いろいろ普段は見ることのできない画像をみることでおもしろかったです。ありがとうございました。

先生のまとめをきいて、ずっと整理できなかったことがやっとできたなと思いました。立川流やドクロについては京極夏彦「狂骨の夢」を思い出しましたがやっとちゃんとした知識を得れた気がします。大変面白かったです。来年もきっととります。きっと。

最後のまとめに関してですが、全くてらわずに(とこちらが思う程)エロスやグロテスクを表現できるのは、「生」や「死」について真剣に向き合った結果なのだろう、と感じました。

立川流の即身成仏の方法が今まで自分の聞いたことのあるものと全く異なっていて驚きました。例えば雨月物語などで読んだものでは、地中に生きてまま埋められる、というものでしたし、その作品では色欲と仏道は切り離されていました。まさか即身成仏にエロスが関係することがあるとは・・・と、本当に意外でした。また、今回の授業のまとめは、非常に納得できました。エロスが生、グロテスクが死、そしてその境界は曖昧で、明確に区別されるものではない、という話は、今までの授業を思い出すと、確かにそうだと思います。「仏教文化論」は、私にとって大変楽しい授業でした。

半年間ありがとうございました。聖と俗は相容りしないものと捉えがちですが、何かしらつながりがあるということは新鮮でした。

今日の講義で出てきたチンナマスターが今までで一番グロテスクでした。先生がグロテスクだと言っていた最初の頃の絵より、今回見た絵は気持ち悪いものが多かったと思いました。

とうとう授業が終わってしまいました。立川流の骸骨に男女の性液をぬるというのは、生の抜けたものに生を与えるという点で、あまり死というもののまがまがしいイメージを和らげるというか、死をあいまいかするようなものの捉え方だと思った。

立川流の秘儀が西洋のサバトに思えて仕方がなかった。でも「生命」とか「誕生」とかのイメージを持つ

ものに性液というのは最もわかりやすくふさわしいといえるかもしれない。邪とされるのは恥や常識の文化があるのだろう。なんとなくだが山田風太郎を連想した。(全く関係ないが)

立川流の男女の性液を交せて觸體にぬるという方法は、最初はけがらわしいと思ったが、視点をかえれば男女の交わりによって生命が生まれる、というあたり前のことを基にしていると思った。これも性交という生のイメージとどくろの死のイメージが交じったものだと思った。

エロスがグロテスクに変わっていくのは、エロスの概念の中にグロテスクが含まれているからなのかもしれないと感じた。どちらにせよ人間はエロスでありながらグロテスクなものをもってうまれてきているのだと思う。性器なんて、まさにグロテスクで、エロスなものだと思う。

怪しげな呪法にはドクロと心臓がお決まりですけど、何ででしょうかね？よく心は心臓にあるのか頭にあるのかという話が言われてますが、やっぱり人間の核として重要な役割を持っているんですかね。私たちは一人の人間として完成しているのに、一人だけでは子孫を作れないというのはおもしろいと思います。別に男性と女性が交わらなくても、男性は男性の子孫を産んで、女性は女性の子孫を産んだ方がずっと効率がいいと思うけど(それこそ分裂するみたいに)生物って不思議ですね。生物学的には、性を分けて、その両者から子孫を残すのは、遺伝子レベルで含まれているエラーを少しでも減らすというメリットがあるそうです。

死者を再生させるためにドクロに男女の性液をぬり続けるというのは、文字通りエロスとグロテスクの要素が満載で、かなり異様な世界観だなと思いました。でも、男女の精液からは妊娠、出産をイメージすることもできるので、死者の再生のためというのも、それなりに理にかなっていることなのかなと感じました。

楽しみにしていた立川流の講義だったので、非常に興味深いものでした。立川流の秘儀の方法については知っていましたが、珍しいものではないということが驚きでした。性愛についてですが、新宗教教団の衰退と新新宗教の興隆には性愛について新宗教は消極的で、新新宗教は積極的に教義の中に受け入れたことがあるそうです。立川流も旧来宗教との隔離を性愛によって表そうとしたと思っていたのですが、違って残念でした。

習合は本地垂迹説に比べて、民間的な印象を受けた。形にとらわれずに言ってしまうとこ取りをしてみたり、自分の好きな神(仏)同士をくっつけてみたりというイメージが浮かんだ。パッチワークのようなパロディのような。合体ロボみたいです。

大阪市立美術館のダキニ天マンドラは宗教画というよりもモダンアート、ポップアートのようだなと思った。

エロスとグロテスクが聖性の出現・演出であれば、いつから美=崇高、神秘的なものとしての考え方が一般的になったのだろうか。

この授業では、美術作品をスライドでたくさん見ることができたのでおもしろかったです。今まで仏教とエロス・グロテスクが関連しているなんて思ってなかったのが、そういう作品・神がけっこういることに驚きました。個人的には蛇、象、キツネとの関連がおもしろかったです。これから違う視点をもって仏教

美術見れていけたらいいなと思います。今日の授業の感想じゃなくて全体の感想になってしまってすみません。後期の短い間でしたがありがとうございました。ちなみにスライドの最後の方、首と体が離れているチンナマスターのスライドはかなり気味悪かったです。

後醍醐天皇は欲張りな人だと思った。なぜなら、いろいろな神様を信仰していたので、きっとなんでも手に入れて、自分の思い通りにしたかった人だと思ったからだ。

エロスとグロテスクの仏(宗)教美術をたくさん観てきました。エロスはともかく、グロテスクは嫌悪感を抱くようなものだと思っていました。実際に相当スリリングです。けれど、ほとんどの作品は、少し滑稽で愛着が湧くものが多いです。聖と俗の変換ですね。来年も楽しみにしています。

立川流は本当にあまり分かりませんでした……。あそこまで性的なことが儀式に含まれていると、驚きました。神話や説話にあるそのような話ではなく。性に神秘を感じているのか、禁欲的な宗教たちに対する反動みたいなものなのか、よく分かりませんでした……。

立川流に関してはけっこういろいろな場面で話が出てくるので、詳しい話が聞けてよかったです。かなり興味深いものでした。個人的には天川弁財天よりも今回出てきたチンナマスターのほうがグロテスクに感じられました。首から血が吹き出してそれを飲むって……。下で交わる男女もよく分かりません。

今期の授業で、何でもグロテスクだと言われればそう見えてくるような気がしました。特にこの授業では、グロテスクという前提を持って様々なものを見ていくと、意外と様々なものがそう見えてくるのだと思います。そう考えると何がグロテスクなのか、何が聖で俗なのかということと言い切るのは難しいですね。普段と違う、これまでと異なるものがグロテスクと言った方が適切なのかと思いました。

チベットのマンダラの尊格は足が開いていたり動きがあったりするイメージなのだが、マハーカーラはちょこんと足を閉じているので珍しい気がした。顔もマンガみたいでおもしろい。

エロス系イメージの仏の習合については分かりにくいところだったので、今日改めて“増殖するイメージ”と言われたことで少しイメージがつかめました。複数の仏やそのシンボルが同時に存在したり、複在したり……。解説がつくと読み解くのも楽しいですが、やはり難しいです。

今まで仏教美術(その他についても)でグロテスクなものを、あえて取り扱うことについて理解できずにいましたが、半期授業をうけてみて、それが聖性を認めているから、とまとめることにも納得がいくように思います。

チンナマスターと天川弁財天マンダラはたしかに似てるなと思いました。性瑜伽の前の「秘密灌頂」の描写が気持ち悪かったです。エロスがグロテスクに変化していくというよりも、エロスそのものがグロテスクに感じました。

習合について初めにありましたが、よく考えるとよくわからない概念だなあと感じました。発生、経緯やその意味って何だろうと思います。

オットーにはじまり、インドをめぐる立川流にいたる広範囲の授業でした。広いだけでなく、個別テーマが毎回ように出てくる興味深いものでした。

本日の授業では、画像を拡大してくださり、ありがとうございました。よく見えました。天川弁才天のへび（顔が3つあるうち中央）はめがねをかけているように見えたが気のせいでしょうか…。

インドの宗教美術にとってもひかれました。ガネーシャも、ダーキニーもチンナマスターもどこか可愛らしいです。

エロスとグロテスクの授業とてもおもしろかったです。真逆なのに深くつながっているという感覚が好きで死から生がよみがえってくるというのまさに仏教だなと思いました。

レジュメ 12 の「世界の終わりの女神と始まりのシヴァ」 なぜ死が「終」で水が「始」？経済学部では、エロスとグロテスクなんて授業はないのでとても楽しかった。もう三年生だが文学部の方が向いているのでは・・・とも思った。そのくらい楽しかった！私は人が死んでいって腐っていく過程の絵が一番好きだった。一番身近にあるものだからか？

たしかに、経済学部では「エロスとグロテスクの経済学」なんていう授業はないでしょうね。あってもいいとは思いますが……。経済学部の皆さんも、文学部の授業はある程度は卒業の単位にもなりますし、単位を気にしなければ、いくらでも取りに来てください。せっかく高い授業料を払っているのですから。

あまり関係なさそうでも、よく考えるとつながりというか共通点があったりしているところがあったりする仏って多い気がした。神とか仏の世界はこんなにグロテスクな部分やエロスの部分があるとは思っていなかった。

私も「あまり関係なさそうでも、よく考えるとつながっている」というのが好きです。みんなが気づかないところで見つけると、けっこううれしいものです。

以前、立川流の密儀が少し書かれた小説を読みました。赤白～、八年～、というのを見て、異常さが先だったのだけれど、密儀の形状をとらなければ、生命を生み出す行動なのだと考えを改めることになった。

神と仏の堺がどこにあるのか、元々はっきりわかっていたわけではないのですが、神仏習合などを見ると更にわ分からなくなった。また、仏教といえば講義を受ける前は「聖」のもので「性」は関係ないと思っていたのですが、そうではないようだとも思うようになりました。この講義で色々なメッセージが混ざり合い、境があやふやなものになり、おもしろかったです。

立川流についてだが、男女の性的な交わりが即身成仏につながり、死者の再生を呼び起こす手段となる、と聞いて驚いた。立川流が奇異だというよりは密教そのものに觸穢を用いることが一般的であり、その中には性的なニュアンスが多く含まれていると聞いて理解できた。愛染明王が立川流においていかに密接に結びついているか、エロス、性の観点から数回にわたり理解できた。14回の授業、毎回楽しみで深くインド、チベット、日本などのアジア文化を比較できたと思います。ありがとうございました。

半年間ありがとうございました。

先生が頭だけはヘビの絵が無理だといわれていましたが、僕はそうでもありません。この講義ではほかにもっと絵があったはずですが、他の絵は大丈夫なのですか？

たいていは大丈夫です。天川弁才天も、今回の授業でかなり見慣れました。

ドクロを用いる修法は立川流独特のものだと思っていたので、そうではないのだと知って驚いた。授業全体を通した、ともすれば正反対のものにとらえがちなエロスとグロテスク、生と死の結びつきの強さを感じた。

習合は本当にごちゃごちゃからまってよく分かりませんでした。絵を描いた人はちゃんと分かって描いたのでしょうか。何となくのイメージで描いたと思うのですが。

レポート課題難しいです。でも今までは先生に教えていただく一方でしたが、今度は自分で考えてみるいいチャンスだと思いました。エロスとグロテスクについて思いをめぐらせたんです。

世界の終わりの女神とシヴァの図はこの授業の中で一番エロスグロテスクが共にあらわになっている図だと思いました。首を切りながら（グロテスク）性交をする（エロス）っていうのが、なかなか気持ち悪かったけど、ただ下に横たわっているだけのシヴァも気味悪かったです。世界の終わり（火）と始まり（川？）の間に性交が置かれているのは、世界は生命と関係があるもの、ということなのかなと思いました。

はじめの回で紹介したマリアとエヴァ（イヴ）の絵も、これに通じますね。

エロスもグロテスクも両者とも聖なるイメージとしてとらえるというのは難しいが、どちらも日常から逸脱しているという点で共通していると考える。恐れという感情も崇拜する心に通じるものがあると感じた。

立川流の秘儀でドクロに塗る赤白二滴は生々しいなと思ったのですが、男性の精液が白いのは分かりますが、女性の精液が赤いというのはどういうことなのでしょう。赤い、というと破瓜の時の血というイメージがありますが、男性は処女ばかりと性交していたのでしょうか。昔は今のように処女信仰なんてなかったとは思いますが…性交自体もエロスとグロテスクを併せ持っているような気がします。

女性の赤い体液は経血ともいわれます。インド密教の性瑜伽では、だいたいそうです。

立川流が実は邪教とされるほど特異なものではないという主張がなされているようですが、私は立川流の邪教的側面をもっと知りたいと思いました。『三国志演義』が正史『三国志』より親しまれているようなイメージです（？）

男女の性交による邪法が行われていて、しかも、それが精液を用いるものであるなんてのは、どうも思考の幅を遙かに上回っていて、どんな雰囲気で行われていたのか想像もつきません。

チンナマスターについてですが、食べるものがないときに、「血」を飲ませるという点に、違和感を覚えました。グロテスクな話ですが、手足などを固定物であってもいいのに……。血には生命力があってそれを飲ませると生きられるというイメージでしょうか？チンナマスターの絵には、頭部（ドクロ）崇拜と

血に対する彼らの感覚が見て取れる気がしました。

あまり関係ないかもしれませんが、生物学的に見て母乳の成分はかなり血液に近いそうです。母が子を養うために与えるものとして、共通するイメージです。

弁財天、大黒天、聖天等と摩多羅、あるいはチンナマスターの首が切れる→ドクロ→立川流といったインドから日本のイメージの伝播というのは非常に面白かったです。論文としてまとめられたら、とてもおもしろそうですね。ただ、そういう事実はともかく、理論的な部分をまとめようとすると、とても苦労しそうな気がします。 (笑) それにしても、こういうエロ系も、迫害されつつもしっかり伝わるあたり、たいした伝染力ですね。

前に見たミトゥラ交合像でもそうでしたが、赤いダキニのしていた黄金の腰巻きがきれいでした。インドの女性の石像レリーフでも美しい造形の腰巻きもきれいでしたね。血とか首とかドクロとか、インド仏教は生々しいモチーフが多いですね！日本では隠されがちですが……。なぜなのでしょう。それともこれは、ごく一部を取り出しているからそう見えるだけですか？カーリーとシヴァの世界の終わり始まりの絵で、前の方の花咲く野原に頭が散らばっているのがすごく怖かったです。ていうか何故あんなところに頭が？だれのもの？

陰毛を宝としてまつるというのにはおどろいた。そんなデリケートなものをまつっていらっしゃるのだろうか？

グロテスクと思うものにはよく女の人が出てくるのは気のせいだろうか。

美術も文学も、大半は男性が作ったものだからでしょう。